

大阪感染症情報解析委員会「今週のトピックス」

毎週火曜日に、その前の1週間に府内保健所に報告があった全数把握感染症および、小児科定点把握疾患と眼科定点疾患の数を集計し、水曜日に開催される大阪感染症情報解析委員会において府内における感染症の流行状況を検討し、「今週のトピックス」を決定している。この情報は、大阪府感染症情報センターのホームページ（<http://iph.pref.osaka.jp>）を通じて広く府民に還元した。

2019年 小児科・眼科定点把握感染症の報告数上位5疾患とトピックス

週	1位	2位	3位	4位	5位	TOPICS
1	感染性胃腸炎 500	A群溶連菌咽頭炎 131	RSウイルス感染症 79	水痘 74	咽頭結膜熱 38	
2	感染性胃腸炎 1,422	A群溶連菌咽頭炎 365	RSウイルス感染症 118	水痘 114	伝染性紅斑 111	インフルエンザ 警報レベル超える
3	感染性胃腸炎 1,357	A群溶連菌咽頭炎 380	RSウイルス感染症 123	伝染性紅斑 112	咽頭結膜熱 70	インフルエンザ 警報レベル超え続く
4	感染性胃腸炎 1,490	A群溶連菌咽頭炎 447	RSウイルス感染症 134	伝染性紅斑 105	水痘 68	インフルエンザ 警報レベル超え続く
5	感染性胃腸炎 1,432	A群溶連菌咽頭炎 448	RSウイルス感染症 116	伝染性紅斑 95	咽頭結膜熱 66	インフルエンザ ピーク超える
6	感染性胃腸炎 1,270	A群溶連菌咽頭炎 458	RSウイルス感染症 136	咽頭結膜熱 86	水痘 73	インフルエンザ 減少
7	感染性胃腸炎 1,177	A群溶連菌咽頭炎 354	RSウイルス感染症 158	咽頭結膜熱 85	伝染性紅斑 62	インフルエンザ 3週連続減少
8	感染性胃腸炎 1,404	A群溶連菌咽頭炎 510	RSウイルス感染症 172	咽頭結膜熱 75	伝染性紅斑 83	インフルエンザ さらに減少
9	感染性胃腸炎 1,314	A群溶連菌咽頭炎 550	RSウイルス感染症 197	咽頭結膜熱 95	伝染性紅斑 86	インフルエンザ 減少続く
10	感染性胃腸炎 1,405	A群溶連菌咽頭炎 586	RSウイルス感染症 225	伝染性紅斑 83	咽頭結膜熱 71	RSウイルス感染症 増加
11	感染性胃腸炎 1,405	A群溶連菌咽頭炎 536	RSウイルス感染症 228	咽頭結膜熱 95	伝染性紅斑 80	インフルエンザ 増加続く
12	感染性胃腸炎 1,223	A群溶連菌咽頭炎 458	RSウイルス感染症 247	伝染性紅斑 101	咽頭結膜熱 93	RSウイルス感染症 さらに増加続く
13	感染性胃腸炎 1,096	A群溶連菌咽頭炎 428	RSウイルス感染症 228	伝染性紅斑 100	咽頭結膜熱 93	感染性胃腸炎 減少
14	感染性胃腸炎 1,046	A群溶連菌咽頭炎 355	RSウイルス感染症 197	伝染性紅斑 101	手足口病 81	インフルエンザ 減少続く
15	感染性胃腸炎 1,398	A群溶連菌咽頭炎 472	RSウイルス感染症 233	手足口病 161	伝染性紅斑 117	手足口病 増加
16	感染性胃腸炎 1,657	A群溶連菌咽頭炎 563	RSウイルス感染症 258	手足口病 245	伝染性紅斑 158	インフルエンザ 2週連続増加、注意
17	感染性胃腸炎 1,698	A群溶連菌咽頭炎 574	手足口病 365	RSウイルス感染症 201	咽頭結膜熱 148	手足口病 5週連続増加
18	感染性胃腸炎 470	手足口病 166	A群溶連菌咽頭炎 127	RSウイルス感染症 92	水痘 46	インフルエンザ 非流行期へ
19	感染性胃腸炎 1,047	A群溶連菌咽頭炎 448	手足口病 207	咽頭結膜熱 132	伝染性紅斑 131	
20	感染性胃腸炎 1,324	A群溶連菌咽頭炎 607	手足口病 502	伝染性紅斑 168	咽頭結膜熱 104	手足口病 増加
21	感染性胃腸炎 1,362	手足口病 772	A群溶連菌咽頭炎 596	伝染性紅斑 150	咽頭結膜熱 149	手足口病 増加続く
22	感染性胃腸炎 1,338	手足口病 930	A群溶連菌咽頭炎 663	ヘルパンギーナ 140	伝染性紅斑 129	夏型感染症（手足口病、ヘルパンギーナ）増加
23	手足口病 1,397	感染性胃腸炎 1,249	A群溶連菌咽頭炎 653	ヘルパンギーナ 262	伝染性紅斑 170	手足口病、警報レベル超える
24	手足口病 1,979	感染性胃腸炎 1,106	A群溶連菌咽頭炎 546	ヘルパンギーナ 397	伝染性紅斑 188	手足口病 府内全域で増加続く
25	手足口病 1,803	感染性胃腸炎 1,085	A群溶連菌咽頭炎 510	ヘルパンギーナ 350	伝染性紅斑 233	手足口病、やや減少
26	手足口病 1,780	感染性胃腸炎 908	A群溶連菌咽頭炎 470	ヘルパンギーナ 371	伝染性紅斑 240	手足口病、減少続くも警報レベルを超えている
27	手足口病 1,729	感染性胃腸炎 923	A群溶連菌咽頭炎 462	ヘルパンギーナ 433	伝染性紅斑 257	手足口病、減少傾向だが全ブロックで警報レベル
28	手足口病 1,689	感染性胃腸炎 862	A群溶連菌咽頭炎 460	ヘルパンギーナ 435	伝染性紅斑 215	手足口病 ピークは過ぎつつあるが、流行続く
29	手足口病 1,184	感染性胃腸炎 745	ヘルパンギーナ 373	A群溶連菌咽頭炎 354	伝染性紅斑 255	夏型感染症（手足口病、ヘルパンギーナ）減少
30	手足口病 892	感染性胃腸炎 821	ヘルパンギーナ 380	A群溶連菌咽頭炎 348	伝染性紅斑 210	手足口病 さらに減少
31	感染性胃腸炎 699	手足口病 679	ヘルパンギーナ 335	A群溶連菌咽頭炎 277	RSウイルス感染症 224	RSウイルス感染症 増加
32	感染性胃腸炎 668	手足口病 407	A群溶連菌咽頭炎 291	RSウイルス感染症 276	ヘルパンギーナ 247	RSウイルス感染症 今後も注意
33	感染性胃腸炎 328	RSウイルス感染症 206	手足口病 192	A群溶連菌咽頭炎 125	ヘルパンギーナ 115	
34	感染性胃腸炎 698	RSウイルス感染症 244	手足口病 217	A群溶連菌咽頭炎 202	ヘルパンギーナ 150	RSウイルス感染症 引き続き注意を
35	感染性胃腸炎 790	RSウイルス感染症 467	A群溶連菌咽頭炎 295	手足口病 285	ヘルパンギーナ 189	RSウイルス感染症 前週比91%増
36	感染性胃腸炎 756	RSウイルス感染症 701	手足口病 308	A群溶連菌咽頭炎 276	ヘルパンギーナ 246	RSウイルス感染症 さらに増加
37	RSウイルス感染症 873	感染性胃腸炎 743	A群溶連菌咽頭炎 373	手足口病 260	ヘルパンギーナ 203	RSウイルス感染症 過去最高の報告数
38	RSウイルス感染症 832	感染性胃腸炎 685	A群溶連菌咽頭炎 281	手足口病 239	ヘルパンギーナ 132	RSウイルス感染症 やや減少
39	RSウイルス感染症 755	感染性胃腸炎 560	A群溶連菌咽頭炎 282	手足口病 166	伝染性紅斑 120	RSウイルス感染症 減少続く
40	RSウイルス感染症 695	感染性胃腸炎 640	A群溶連菌咽頭炎 288	手足口病 161	伝染性紅斑 151	RSウイルス感染症 減少続くも昨年同時期より高いレベル
41	RSウイルス感染症 702	感染性胃腸炎 661	A群溶連菌咽頭炎 354	手足口病 179	伝染性紅斑 129	RSウイルス感染症 引き続き昨年同時期より高いレベル
42	感染性胃腸炎 597	RSウイルス感染症 464	A群溶連菌咽頭炎 298	手足口病 147	伝染性紅斑 84	RSウイルス感染症 減少
43	感染性胃腸炎 581	RSウイルス感染症 385	A群溶連菌咽頭炎 281	手足口病 125	伝染性紅斑 118	RSウイルス感染症 さらに減少
44	感染性胃腸炎 708	A群溶連菌咽頭炎 395	RSウイルス感染症 298	手足口病 153	伝染性紅斑 141	感染性胃腸炎 増加
45	感染性胃腸炎 717	A群溶連菌咽頭炎 357	RSウイルス感染症 231	伝染性紅斑 109	手足口病 108	インフルエンザ 増加続く
46	感染性胃腸炎 1,034	A群溶連菌咽頭炎 500	RSウイルス感染症 153	伝染性紅斑 115	手足口病 96	インフルエンザ さらに増加
47	感染性胃腸炎 1,081	A群溶連菌咽頭炎 493	伝染性紅斑 119	RSウイルス感染症 116	手足口病 94	インフルエンザ 流行期入り
48	感染性胃腸炎 1,345	A群溶連菌咽頭炎 591	RSウイルス感染症 130	水痘 121	伝染性紅斑 108	インフルエンザ 流行入りし増加続く
49	感染性胃腸炎 1,426	A群溶連菌咽頭炎 629	RSウイルス感染症 132	咽頭結膜熱 130	伝染性紅斑 127	インフルエンザ 急増
50	感染性胃腸炎 1,517	A群溶連菌咽頭炎 691	RSウイルス感染症 123	咽頭結膜熱 121	伝染性紅斑 110	インフルエンザ 注意報レベル迫る
51	感染性胃腸炎 1,677	A群溶連菌咽頭炎 684	RSウイルス感染症 147	伝染性紅斑 121	咽頭結膜熱 113	インフルエンザ 注意報レベル超える
52	感染性胃腸炎 1,594	A群溶連菌咽頭炎 594	RSウイルス感染症 141	咽頭結膜熱 136	伝染性紅斑 99	インフルエンザ 注意報レベル超え続く

注1: 疾患名は小児科定点の対象疾患です。 注2: 週遅れデータは含まれていません。
 注3: A群溶血性レンサ球菌咽頭炎はA群溶連菌咽頭炎と表示しています。

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2018 (平成30) 年第52週～2019 (平成31) 年第1週 (12月24日～1月6日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 注意レベルを上回る 今後の動向に注意」

2018年第52週と2019年第1週をあわせて報告する。
2018年第52週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,454例、2019年第1週は910例であり、2週連続して減少した。第1週の定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.51、0.66、0.40、0.37、0.19であった。インフルエンザの第52週の報告数は3,337例、第1週は4,422例、定点あたり報告数は年末年始休暇の影響にもかかわらず第51週よりも更に増加し、第52週は11.01、第1週は14.64と2週連続して注意レベルの基準値である10.00を上回った。第1週では大阪市西部76.40、大阪市北部28.05、大阪市南部19.23、豊能12.97、南河内11.88、堺市10.69、北河内10.02とブロックで10.00を上回った。休暇が終了した第2週以降、インフルエンザは更に急増する可能性が高く、今後の動向には注意が必要である。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019 (平成31) 年第1週12月31日～1月6日)

第1週の順位	第52週の順位	感染症	2019年第1週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第1週の定点あたり報告数	2019年第1週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.51	64%減	2.92	1歳、20歳以上_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.66	66%減	0.79	10-14歳_12%
3	4	RSウイルス感染症	0.40	44%減	0.93	1歳未満_52%
4	5	水痘	0.37	25%減	0.43	7歳、10-14歳_15%
5	3	咽頭結膜熱	0.19	77%減	0.17	3歳_26%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	14.64	33%増	12.70	20歳以上_53%

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019 (平成31) 年第2週 (1月7日～1月13日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 警報レベルを超える」

第2週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,367例であり、前週比160.1%増(H30年52週比では3.5%減)であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.15、1.83、0.59、0.58、0.57である。感染性胃腸炎は前週比184%増の1,422例で、南河内12.88、大阪市北部9.50、中河内8.00、大阪市西部7.90であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は179%増の365例で、堺市2.63、大阪市南部2.56、南河内2.31、泉州2.29である。RSウイルス感染症は49%増の118例で、大阪市北部1.14、泉州0.71、北河内・中河内0.70であった。流行性角結膜炎は329%増の30例で、三島1.50、南河内1.25、大阪市西部1.00である。水痘は54%増の114例で、中河内1.40、南河内0.81、泉州0.57であった。インフルエンザは151%増(H30年52週比233%増)の11,117例で定点あたり報告数は36.81となり、警報レベル開始基準値30.00を超えた。ブロック別では大阪市西部74.27、大阪市北部47.75、南河内44.96、堺市39.41、大阪市南部38.77、泉州37.38、北河内36.12のブロックが警報開始レベルを超えている。平成30年12月までの大阪府内のウイルス検出状況はA/H1pdm09が大部分であった。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019 (平成31) 年第2週1月7日～1月13日)

第2週の順位	第1週の順位	感染症	2019年第2週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第2週の定点あたり報告数	2019年第2週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.15	184%増	4.85	1歳_19%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.83	179%増	1.56	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.59	49%増	0.86	1歳未満_58%
4	7	流行性角結膜炎	0.58	329%増	0.31	20歳以上_80%
5	4	水痘	0.57	54%増	0.37	7歳_15%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	36.81	151%増	21.49	20歳以上_30%

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019 (平成31) 年第2週 (1月7日～1月13日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 警報レベルを超える」

第2週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,367例であり、前週比160.1%増(H30年52週比では3.5%減)であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.15、1.83、0.59、0.58、0.57である。感染性胃腸炎は前週比184%増の1,422例で、南河内12.88、大阪市北部9.50、中河内8.00、大阪市西部7.90であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は179%増の365例で、堺市2.63、大阪市南部2.56、南河内2.31、泉州2.29である。RSウイルス感染症は49%増の118例で、大阪市北部1.14、泉州0.71、北河内・中河内0.70であった。流行性角結膜炎は329%増の30例で、三島1.50、南河内1.25、大阪市西部1.00である。水痘は54%増の114例で、中河内1.40、南河内0.81、泉州0.57であった。インフルエンザは151%増(H30年52週比233%増)の11,117例で定点あたり報告数は36.81となり、警報レベル開始基準値30.00を超えた。ブロック別では大阪市西部74.27、大阪市北部47.75、南河内44.96、堺市39.41、大阪市南部38.77、泉州37.38、北河内36.12のブロックが警報開始レベルを超えている。平成30年12月までの大阪府内のウイルス検出状況はA/H1pdm09が大部分であった。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019 (平成31) 年第2週1月7日～1月13日)

第2週の順位	第1週の順位	感染症	2019年第2週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第2週の定点あたり報告数	2019年第2週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.15	184%増	4.85	1歳_19%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.83	179%増	1.56	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.59	49%増	0.86	1歳未満_58%
4	7	流行性角結膜炎	0.58	329%増	0.31	20歳以上_80%
5	4	水痘	0.57	54%増	0.37	7歳_15%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	36.81	151%増	21.49	20歳以上_30%

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019 (平成31) 年第2週 (1月7日～1月13日)

今週のコメント
～ Dengue熱 ～ 海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

Dengue熱

Dengue熱は、ネタイシマカやヒトシジミなどの蚊によって媒介されるDengueウイルスの感染症である。比較軽症型のDengue熱と、重症型のDengue出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がDengue熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例(輸入症例)が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

インフルエンザ

感染性胃腸炎

表2. 大阪府全数報告数 (2019 (平成31) 年第2週1月7日～1月13日)

* 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症 1									
4類感染症	A型肝炎 2									
	Dengue熱 1									
5類感染症 (麻しん、風しんは除く)	レジオネラ症(肺炎型) 1									
	カルバペネム耐性腸内細菌感染症 2									
	Dengue熱 1									
6類感染症	Dengue熱 1									
7類感染症	Dengue熱 1									
8類感染症	Dengue熱 1									
9類感染症	Dengue熱 1									
10類感染症	Dengue熱 1									
11類感染症	Dengue熱 1									
12類感染症	Dengue熱 1									
13類感染症	Dengue熱 1									
14類感染症	Dengue熱 1									
15類感染症	Dengue熱 1									
16類感染症	Dengue熱 1									
17類感染症	Dengue熱 1									
18類感染症	Dengue熱 1									
19類感染症	Dengue熱 1									
20類感染症	Dengue熱 1									
21類感染症	Dengue熱 1									
22類感染症	Dengue熱 1									
23類感染症	Dengue熱 1									
24類感染症	Dengue熱 1									
25類感染症	Dengue熱 1									
26類感染症	Dengue熱 1									
27類感染症	Dengue熱 1									
28類感染症	Dengue熱 1									
29類感染症	Dengue熱 1									
30類感染症	Dengue熱 1									
31類感染症	Dengue熱 1									
32類感染症	Dengue熱 1									
33類感染症	Dengue熱 1									
34類感染症	Dengue熱 1									
35類感染症	Dengue熱 1									
36類感染症	Dengue熱 1									
37類感染症	Dengue熱 1									
38類感染症	Dengue熱 1									
39類感染症	Dengue熱 1									
40類感染症	Dengue熱 1									
41類感染症	Dengue熱 1									
42類感染症	Dengue熱 1									
43類感染症	Dengue熱 1									
44類感染症	Dengue熱 1									
45類感染症	Dengue熱 1									
46類感染症	Dengue熱 1									
47類感染症	Dengue熱 1									
48類感染症	Dengue熱 1									
49類感染症	Dengue熱 1									
50類感染症	Dengue熱 1									
51類感染症	Dengue熱 1									
52類感染症	Dengue熱 1									
53類感染症	Dengue熱 1									
54類感染症	Dengue熱 1									
55類感染症	Dengue熱 1									
56類感染症	Dengue熱 1									
57類感染症	Dengue熱 1									
58類感染症	Dengue熱 1									
59類感染症	Dengue熱 1									
60類感染症	Dengue熱 1									
61類感染症	Dengue熱 1									
62類感染症	Dengue熱 1									
63類感染症	Dengue熱 1									
64類感染症	Dengue熱 1									
65類感染症	Dengue熱 1									
66類感染症	Dengue熱 1									
67類感染症	Dengue熱 1									
68類感染症	Dengue熱 1									
69類感染症	Dengue熱 1									
70類感染症	Dengue熱 1									
71類感染症	Dengue熱 1									
72類感染症	Dengue熱 1									
73類感染症	Dengue熱 1									
74類感染症	Dengue熱 1									
75類感染症	Dengue熱 1									
76類感染症	Dengue熱 1									
77類感染症	Dengue熱 1									
78類感染症	Dengue熱 1									
79類感染症	Dengue熱 1									
80類感染症	Dengue熱 1									
81類感染症	Dengue熱 1									
82類感染症	Dengue熱 1									
83類感染症	Dengue熱 1									
84類感染症	Dengue熱 1									
85類感染症	Dengue熱 1									
86類感染症	Dengue熱 1									
87類感染症	Dengue熱 1									
88類感染症	Dengue熱 1									
89類感染症	Dengue熱 1									
90類感染症	Dengue熱 1									
91類感染症	Dengue熱 1									
92類感染症	Dengue熱 1									
93類感染症	Dengue熱 1									
94類感染症	Dengue熱 1									
95類感染症	Dengue熱 1									
96類感染症	Dengue熱 1									
97類感染症	Dengue熱 1									
98類感染症	Dengue熱 1									
99類感染症	Dengue熱 1									
100類感染症	Dengue熱 1									
101類感染症	Dengue熱 1									
102類感染症	Dengue熱 1									
103類感染症	Dengue熱 1									
104類感染症	Dengue熱 1									
105類感染症	Dengue熱 1									
106類感染症	Dengue熱 1									
107類感染症	Dengue熱 1									
108類感染症	Dengue熱 1									
109類感染症	Dengue熱 1									
110類感染症	Dengue熱 1									
111類感染症	Dengue熱 1									
112類感染症	Dengue熱 1									
113類感染症	Dengue熱 1									
114類感染症	Dengue熱 1									
115類感染症	Dengue熱 1									
116類感染症	Dengue熱 1									
117類感染症	Dengue熱 1									
118類感染症	Dengue熱 1									
119類感染症	Dengue熱 1									
120類感染症	Dengue熱 1									
121類感染症	Dengue熱 1									
122類感染症	Dengue熱 1									
123類感染症	Dengue熱 1									
124類感染症	Dengue熱 1									
125類感染症	Dengue熱 1									
126類感染症	Dengue熱 1									
127類感染症	Dengue熱 1									
128類感染症	Dengue熱 1									
129類感染症	Dengue熱 1									
130類感染症	Dengue熱 1									
131類感染症	Dengue熱 1									
132類感染症	Dengue熱 1									
133類感染症	Dengue熱 1									
134類感染症	Dengue熱 1									
135類感染症	Dengue熱 1									
136類感染症	Dengue熱 1									
137類感染症	Dengue熱 1									
138類感染症	Dengue熱 1									
139類感染症	Dengue熱 1									
140類感染症	Dengue熱 1									
141類感染症	Dengue熱 1									
142類感染症	Dengue熱 1									
143類感染症	Dengue熱 1									
144類感染症	Dengue熱 1									
145類感染症	Dengue熱 1									
146類感染症	Dengue熱 1									
147類感染症	Dengue熱 1									
148類感染症	Dengue熱 1									
149類感染症	Dengue熱 1									
150類感染症	Dengue熱 1									
151類感染症	Dengue熱 1									
152類感染症	Dengue熱 1									
153類感染症	Dengue熱 1									
154類感染症	Dengue熱 1									
155類感染症	Dengue熱 1									
156類感染症	Dengue熱 1									
157類感染症	Dengue熱 1									
158類感染症	Dengue熱 1									
159類感染症	Dengue熱 1									
160類感染症	Dengue熱 1									
161類感染症	Dengue熱 1									
162類感染症	Dengue熱 1									
163類感染症	Dengue熱 1									
164類感染症	Dengue熱 1									
165類感染症	Dengue熱 1									
166類感染症	Dengue熱 1									
167類感染症	Dengue熱 1									
168類感染症	Dengue熱 1									
169類感染症	Dengue熱 1									
170類感染症	Dengue熱 1									
171類感染症	Dengue熱 1									
172類感染症	Dengue熱 1									
173類感染症	Dengue熱 1									
174類感染症	Dengue熱 1									
175類感染症	Dengue熱 1									
176類感染症	Dengue熱 1									
177類感染症	Dengue熱 1									
178類感染症	Dengue熱 1									
179類感染症	Dengue熱 1									
180類感染症	Dengue熱 1									
181類感染症	Dengue熱 1									
182類感染症	Dengue熱 1									
183類感染症	Dengue熱 1									
184類感染症	Dengue熱 1									
185類感染症	Dengue熱 1									
186類感染症	Dengue熱 1									
187類感染症	Dengue熱 1									
188類感染症	Dengue熱 1									
189類感染症	Dengue熱 1									
190類感染症	Dengue熱 1									
191類感染症	Dengue熱 1									
192類感染症	Dengue熱 1									
193類感染症	Dengue熱 1									
194類感染症	Dengue熱 1									
195類感染症	Dengue熱 1									
196類感染症	Dengue熱 1									
197類感染症	Dengue熱 1									
198類感染症	Dengue熱 1									
199類感染症	Dengue熱 1									
200類感染症	Dengue熱 1									
201類感染症	Dengue熱 1									
202類感染症	Dengue熱 1									
203類感染症	Dengue熱 1									
204類感染症	Dengue熱 1									
205類感染症	Dengue熱 1									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年(平成31)年 第3週(1月14日~1月20日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 警戒レベル超え続く」

第3週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,234例であり、前週比5.6%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、流行性角結膜炎の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.82、1.91、0.62、0.56、0.37である。感染性胃腸炎は前週比5%減の1,357例で、南河内14.56、北河内8.44、泉州7.48、中河内7.05、大阪府西部6.90であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%増の380例で、大阪府南部3.06、南河内2.88、堺市2.47、北河内2.30である。RSウイルス感染症は4%増の123例で、南河内1.00、大阪府北部0.93、大阪府西部0.90、中河内0.75であった。伝染性紅斑は1%増の112例で、豊能1.50、大阪府北部1.14、三島0.94である。流行性角結膜炎は37%減の19例で、三島1.00、北河内0.67、豊能・堺市0.60であった。インフルエンザは25%増の13,920例で定点あたり報告数は46.09となり、前週に引き続き警戒レベル30.00を超えた。ブロック別では大阪府北部70.05、大阪府西部63.53、南河内57.38、堺市52.45、北河内50.24の順に多く、11ブロックすべてで警戒レベルを超えている。

インフルエンザ (定点あたり報告数) | A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 (定点あたり報告数)

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019(平成31)年 第3週1月14日~1月20日)

第3週の順位	第2週の順位	感染症	2019年第3週の定点あたり報告数	前週比	2018年第3週の定点あたり報告数	2019年第3週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.82	5%減	5.74	1歳_18%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.91	4%増	2.10	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.62	4%増	0.65	1歳_25%
4	6	伝染性紅斑	0.56	1%増	0.06	6歳_21%
5	4	流行性角結膜炎	0.37	37%減	0.37	20歳以上_95%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	46.09	25%増	44.17	20歳以上_25%

第3週のコメント

～麻しん～ ワクチンで予防可能な感染症です。2018年、大阪府内の累積感染者数は19例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん(はしか)は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う急性ウイルス感染症で、感染すると高熱・結膜炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1~2週間である。強い感染力(一人の患者が12~18人に感染伝播)のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状(発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発疹等)が、1)1か月以内の麻しん患者と接触していた場合、2)麻しん流行国(主にアジア及びアフリカ諸国)に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝える。指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン(1歳以上で2回)で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

感染疫学センターはこちら(外部リンク)
麻疹とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数(2019(平成31)年 第3週1月14日~1月20日)

*注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	報告数	府内累積
3類感染症	報告はありません										
4類感染症	E型肝炎	1							1		1
	デング熱	2	2								4
5類感染症 (麻しん、風しん除く)	カルバペム耐性腸内細菌感染症	3	1	2							7
	急性脳炎	1				1					4
	新変種溶血性レンサ球菌感染症	1								1	1
	後天性免疫不全症候群	1								1	1
	慢性的インフルエンザ感染症	1								1	4
	慢性的髄膜炎菌感染症	1								1	1
	慢性的肺炎球菌感染症	1						1			12
	梅毒	10	1	1	1	2				6	30
	パンコマイシン耐性腸菌感染症	1							1		1
	百日咳	13	3		1	1	3	1	1	3	31
結核 (2018年11月分)	結核 新登録患者数: 167名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 66名) (府内累積報告数 1,673名、内 肺・喀痰塗抹陽性 652名)										
麻しん、麻しん	麻しん 8名 (豊能 2名、南河内 1名、堺市 2名、大阪府 3名、府内累積報告数 15名)										
	麻しん 8名 (豊能 3名、大阪府 5名、府内累積報告数 14名)										

(2019年1月22日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年(平成31)年 第4週(1月21日~1月27日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 警戒レベル超え続く」

第4週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,426例であり、前週比8.6%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.49、2.25、0.67、0.53、0.34である。感染性胃腸炎は前週比10%増の1,490例で、南河内15.56、中河内9.10、北河内8.82、泉州7.14、大阪府南部7.11であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は18%増の447例で、南河内3.69、堺市3.63、大阪府南部3.28、大阪府西部2.60である。RSウイルス感染症は9%増の134例で、南河内1.13、大阪府北部1.00、大阪府西部0.80、中河内0.75、大阪府南部0.72であった。伝染性紅斑は6%減の105例で、豊能1.41、三島0.77、大阪府北部0.71、中河内0.55、堺市0.53である。水痘は26%増の68例で、中河内・三島0.65、泉州0.48であった。インフルエンザは4%増の14,493例で定点あたり報告数は47.99となり、前週に引き続き警戒レベル30を超えた。ブロック別では大阪府西部58.33、南河内54.92、北河内53.76、豊能50.00、堺市49.72の順に多く、11ブロックすべてで警戒レベルを超えている。

インフルエンザ (定点あたり報告数) | 伝染性紅斑 (定点あたり報告数)

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019(平成31)年 第4週1月21日~1月27日)

第4週の順位	第3週の順位	感染症	2019年第4週の定点あたり報告数	前週比	2018年第4週の定点あたり報告数	2019年第4週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.49	10%増	5.37	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.25	18%増	1.88	4歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	0.67	9%増	0.63	1歳未満_40%
4	4	伝染性紅斑	0.53	6%減	0.06	4歳_19%
5	8	水痘	0.34	26%増	0.16	3歳4歳_15%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	47.99	4%増	42.48	20歳以上_23%

第4週のコメント

～麻しん～ ワクチンで予防可能な感染症です。2019年、大阪府内の累積感染者数は26例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん(はしか)は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う急性ウイルス感染症で、感染すると高熱・結膜炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1~2週間である。強い感染力(一人の患者が12~18人に感染伝播)のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状(発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発疹等)が、1)1か月以内の麻しん患者と接触していた場合、2)麻しん流行国(主にアジア及びアフリカ諸国)に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝える。指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン(1歳以上で2回)で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

感染疫学センターはこちら(外部リンク)
麻疹とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数(2019(平成31)年 第4週1月21日~1月27日)

*注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	報告数	府内累積	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症											
4類感染症	E型肝炎	1					1				2	
	ウイルス性肝炎	1		1							10	
5類感染症 (麻しん、風しん除く)	カルバペム耐性腸内細菌感染症	2								2	10	
	急性脳炎	1	1								6	
	後天性免疫不全症候群	3			1					2	4	
	慢性的インフルエンザ感染症	1								1	8	
	慢性的肺炎球菌感染症	4	2						1	1	18	
	梅毒	12	1		1	1	2	1	1	10	52	
	百日咳	12	1	1	1	2	1	2	4	4	50	
	結核 (2018年11月分)	結核 新登録患者数: 167名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 66名) (府内累積報告数 1,673名、内 肺・喀痰塗抹陽性 652名)										
	麻しん、麻しん	麻しん 11名 (豊能 1名、北河内 1名、中河内 2名、南河内 1名、堺市 1名、大阪府 5名、府内累積報告数 25名)										
		麻しん 11名 (豊能 6名、大阪府 5名、府内累積報告数 26名)										

(2019年1月29日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第5週 (1月28日～2月3日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ ピーク越える」

第5週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,334例であり、前週比4%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.20、2.25、0.58、0.48、0.39であった。

感染性胃腸炎は前週比4%減の1,432例で、南河内12.56、泉州10.10、北河内9.26である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は448例で、大坂市西部3.94、大坂市南部3.44、堺市3.32であった。

RSウイルス感染症は13%減の116例で、大坂市西部1.10、北河内0.96、大坂市北部0.93である。

伝染性紅斑は10%減の95例で、豊能1.68、大坂市西部0.80、大坂市北部0.71であった。

流行性角結膜炎は33%増の20例で、豊能1.00、中河内0.80、大坂市東部・三島0.50である。

インフルエンザは28%減の10,457例で、定点あたり報告数は34.63であった。南河内46.00、堺市41.83、北河内41.57、大坂市西部40.73、泉州33.94である。全てのブロックで減少したが、依然8ブロックで警報レベル開始基準値(30.00)を超えている。これらAH1pdm09が優勢に検出されている。

インフルエンザ

(定点あたりの報告数)

伝染性紅斑

(定点あたりの報告数)

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第5週1月28日～2月3日)

第5週の順位	第4週の順位	感染症	2019年 第5週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第5週の 定点あたり 報告数	2019年第5週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.20	4%減	4.79	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.25	増減なし	1.85	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.58	13%減	0.62	1歳未満_44%
4	4	伝染性紅斑	0.48	10%減	0.06	6歳_21%
5	8	流行性角結膜炎	0.39	33%増	0.37	20歳以上_75%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	34.63	28%減	45.02	20歳以上_23%

第5週のコメント

～麻しん～ ワクチンで予防可能な感染症です。2019年、大阪府内の累積感染者数は38例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん(はしか)は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発疹性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力(一人の患者が12～18人に感染伝播)のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状(発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等)があり、1) 1か月以内に麻しん患者と接触していた場合、2) 麻しん流行国(主にアジア及びアフリカ諸国)に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関で早期に受診する。受診の際に、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン(1歳以上で2回)で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[麻疹とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第5週1月28日～2月3日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積数
3類感染症										
腸管出血性大腸菌感染症	1				1					3
パロチス	1								1	1
4類感染症										
A型肝炎	1				1					4
レジオネラ症(肺炎型)	1						1			3
5類感染症 (麻しん、風しんは除く)										
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1							1	16
急性弛緩性麻痺	1							1	1	1
創傷型溶血性レンサ球菌感染症	3			1		1	1			4
慢性的肺炎球菌感染症	4	1			1			2		23
梅毒	13			1				4	8	83
バンコマイシン耐性球菌感染症	2	1			1					3
百日咳	12	2		1		2	1	1	5	70
結核	結核 新登録患者数: 172名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 59名)								
(2018年12月分)		(府内累積報告数 1,845名、内 肺・喀痰塗抹陽性 715名)								
風しん、麻しん	風しん 8名	(豊能 2名、北河内 1名、堺市 1名、大阪府 4名、府内累積報告数 32名)								
	麻しん 10名	(豊能 3名、北河内 1名、堺市 1名、泉州 1名、大阪府 4名、府内累積報告数 38名)								
		(2019年2月5日 集計分)								

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第6週 (2月4日～2月10日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少」

第6週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,193例であり、前週比6%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ16.38、2.30、0.68、0.43、0.37であった。

感染性胃腸炎は前週比11%減の1,270例で、南河内11.06、大坂市西部9.20、中河内8.95である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比2%増の458例で、大坂市南部3.83、南河内3.19、堺市3.00であった。

RSウイルス感染症は前週比17%増の136例で、南河内1.94、大坂市北部1.29、北河内1.00である。

咽頭結膜熱は前週比30%増の86例で、中河内1.55、泉州0.62、三島0.47であった。

水痘は前週比18%増の73例で、豊能0.73、泉州0.71、北河内0.56である。

インフルエンザは39%減の6,354例で、定点あたり報告数は21.04であった。南河内30.46、大坂市西部27.73、堺市26.17、北河内25.07、大坂市北部22.10である。全てのブロックで減少し、警報レベル開始基準値(30.00)を超えているのは1ブロックとなった。

インフルエンザ

(定点あたりの報告数)

感染性胃腸炎

(定点あたりの報告数)

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第6週2月4日～2月10日)

第6週の順位	第5週の順位	感染症	2019年 第6週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第6週の 定点あたり 報告数	2019年第6週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.38	11%減	4.75	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.30	2%増	1.88	6歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	0.68	17%増	0.50	1歳未満_38%
4	6	咽頭結膜熱	0.43	30%増	0.20	1歳_30%
5	7	水痘	0.37	18%増	0.17	7歳_23%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	21.04	39%減	36.78	20歳以上_23%

第6週のコメント

～麻しん～ ワクチンで予防可能な感染症です。2019年、大阪府内の累積感染者数は46例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん(はしか)は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発疹性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力(一人の患者が12～18人に感染伝播)のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状(発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等)があり、1) 1か月以内に麻しん患者と接触していた場合、2) 麻しん流行国(主にアジア及びアフリカ諸国)に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関で早期に受診する。受診の際に、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン(1歳以上で2回)で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[麻疹とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第6週2月4日～2月10日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積数
3類感染症	報告はありません									
4類感染症										
A型肝炎	2					1				6
5類感染症 (麻しん、風しんは除く)										
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2					1				22
創傷型溶血性レンサ球菌感染症	1									6
慢性的肺炎球菌感染症	2				1					27
梅毒	8	1							7	98
百日咳	12	3	3	1	2	2		1		89
結核	結核 新登録患者数: 172名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 59名)								
(2018年12月分)		(府内累積報告数 1,845名、内 肺・喀痰塗抹陽性 715名)								
風しん、麻しん	風しん 5名	(堺市 1名、大阪府 4名、府内累積報告数 39名)								
	麻しん 8名	(豊能 1名、三島 2名、大阪府 5名、府内累積報告数 46名)								
		(2019年2月12日 集計分)								

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第7週 (2月11日～2月17日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 3週連続減少」

第7週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,011例であり、前週比8.3%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.92、1.78、0.79、0.43、0.35であった。
感染性胃腸炎は前週比7%減の1,177例で、南河内10.06、大阪府西部8.10、中河内8.00、大阪市北部7.29、泉州7.19である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比23%減の354例で、南河内2.88、中河内2.25、堺市2.16であった。
RSウイルス感染症は前週比16%増の158例で、北河内1.59、南河内1.13、大阪市北部1.07である。
咽頭結膜熱は前週比1%減の85例で、中河内0.75、北河内0.67、三島0.59であった。
流行性角結膜炎は前週比157%増の18例で、南河内1.00、豊能0.80、中河内0.60である。

インフルエンザは56%減の2,903例で、定点あたり報告数は9.28であり、警戒レベル終息基準値(10.00)を下回った。大阪府西部15.73、大阪市北部14.55、南河内14.33、堺市12.21の4ブロックで10.00を超えている。A/H3N2型の検出が増えている。

インフルエンザ

RSウイルス感染症

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第7週2月11日～2月17日)

第7週の順位	第6週の順位	感染症	2019年 第7週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第7週の 定点あたり 報告数	2019年 第7週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.92	7%減	4.56	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.78	23%減	1.69	5歳10-14歳_13%
3	3	RSウイルス感染症	0.79	16%増	0.51	1歳未満_40%
4	4	咽頭結膜熱	0.43	1%減	0.20	1歳_22%
5	9	流行性角結膜炎	0.35	157%増	0.27	20歳以上_78%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	9.28	56%減	26.16	20歳以上_28%

第7週のコメント

～麻疹～ ワクチンで予防可能な感染症です。2019年、大阪府内の累積感染者数は81例です。

全数把握感染症

麻疹

麻疹(はしか)は麻疹ウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発疹性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力(一人の患者が12～18人に感染伝播)のため、麻疹発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻疹排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻疹が流行している。症状(発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等)があり、1) 1か月以内に麻疹患者と接触していた場合、2) 麻疹流行国(主にアジア及びアフリカ諸国)に最近の旅行歴がある場合、麻疹を疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻疹疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻疹はワクチン(1歳以上で2回)で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

(累積報告数)

感染疫学センターはこちらへ(外部リンク)
麻疹とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第7週2月11日～2月17日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	大阪市	大阪府	府内累積報告数
3類感染症	2								1	1
4類感染症	報告はありません									
5類感染症 (麻疹、風しんは除く)	2								2	11
後天性免疫不全症候群	2								2	11
慢性ウイルス肝炎	2	1							1	14
5類感染症 (麻疹、風しんは除く)	3			2			1		1	32
梅毒	7				1		1		5	121
百日咳	11	1		1	1	5			3	116
結核	新登録患者数: 172名	(内) 肺・喀痰塗抹陽性 59名								
(2018年12月分)	(府内累積報告数 1,845名、内 肺・喀痰塗抹陽性 715名)									
風しん、麻疹	風しん 5名	(南河内 1名、大阪市 4名、府内累積報告数 46名)								
	麻疹 27名	(豊能 6名、三島 1名、中河内 2名、堺市 5名、泉州 3名、大阪市 11名、府内累積報告数 81名)								

(2019年2月19日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第8週 (2月18日～2月24日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ さらに減少」

第8週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,412例であり、前週比19.9%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.06、2.56、0.86、0.42、0.38であった。
感染性胃腸炎は前週比19%増の1,404例で、南河内10.50、泉州10.29、大阪市北部8.93、中河内8.10、北河内7.59である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比44%増の510例で、南河内5.00、泉州3.71、堺市3.63であった。
RSウイルス感染症は前週比9%増の172例で、大阪市北部1.43、北河内1.41、大阪市西部1.10である。
伝染性紅斑は前週比34%増の83例で、豊能0.77、大阪市西部0.70、大阪市南部0.67であった。
咽頭結膜熱は前週比12%減の75例で、中河内1.10、北河内0.67、大阪市東部0.40である。

インフルエンザは30%減の1,961例で、定点あたり報告数は6.49であった。大阪府西部9.87、南河内9.54、堺市8.21となり、全てのブロックで警戒レベル終息基準値の10.00を下回った。

インフルエンザ

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第8週2月18日～2月24日)

第8週の順位	第7週の順位	感染症	2019年 第8週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第8週の 定点あたり 報告数	2019年 第8週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.06	19%増	5.18	1歳_13%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.56	44%増	1.92	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.86	9%増	0.56	1歳未満_38%
4	6	伝染性紅斑	0.42	34%増	0.05	5歳_27%
5	4	咽頭結膜熱	0.38	12%減	0.20	1歳_27%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	6.49	30%減	20.31	20歳以上_22%

第8週のコメント

～風しん～ 風しんの患者数は、2013年の流行以降、年々減少していましたが、現在、府内でも風しん患者が増えています。

全数把握感染症

風しん

風しんは、潜伏期間は2～3週間(平均16～18日)で、発熱、発しん、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹性疾患である。妊婦(妊娠20週頃まで)が風しんにかかること、胎児が風しんウイルスに感染し、雑嚥、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達遅れ等の障害をもつ可能性がある(先天性風しん症候群)。感染の予防には、2回の風しん含有ワクチンの定期接種が行われていなかった世代などに当たる30～50歳代男性について、風しんの感染拡大や先天性風しん症候群の発生を防ぐため、抗体検査やワクチン接種が勧められている。

(累積報告数)

感染疫学センターはこちらへ(外部リンク)
風疹とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第8週2月18日～2月24日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	大阪市	大阪府	府内累積報告数
3類感染症	4	1				1	1		1	9
4類感染症	1		1						1	1
5類感染症 (麻疹、風しんは除く)	2						1		1	5
アメーバ赤痢	1								1	3
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1					1			1	30
後天性免疫不全症候群	3	1				1	1		1	17
5類感染症 (麻疹、風しんは除く)	1						1		1	1
慢性ウイルス肝炎	4	2	1	1					1	38
水痘(入院例)	1								1	3
梅毒	19	1			1	1			16	152
播種性クワトロコクス症	1								1	1
百日咳	16	3		1	1	3	2		6	147
結核	結核 新登録患者数: 172名	(内) 肺・喀痰塗抹陽性 59名								
(2018年12月分)	(府内累積報告数 1,845名、内 肺・喀痰塗抹陽性 715名)									
風しん、麻疹	風しん 12名	(豊能 2名、三島 1名、北河内 1名、中河内 1名、南河内 1名、大阪市 6名、府内累積報告数 60名)								
	麻疹 14名	(豊能 1名、三島 1名、中河内 4名、南河内 1名、堺市 2名、大阪市 5名、府内累積報告数 96名)								

(2019年2月26日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第9週 (2月25日～3月3日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少続く」

第9週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,434例であり、前週比0.9%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ16.60、2.76、0.99、0.48、0.43であった。
感染性胃腸炎は前週比6%減の1,314例で、南河内12.06、泉州10.48、中河内7.05、北河内6.52、大阪市北部6.50である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比8%増の550例で、南河内4.69、中河内3.35、大阪市南部3.22、堺市3.05、北河内3.04であった。
RSウイルス感染症は前週比15%増の197例で、北河内1.67、南河内1.31、大阪市西部・中河内1.20である。
咽頭結膜熱は前週比27%増の95例で、中河内1.10、三島0.88、北河内0.63であった。
伝染性紅斑は前週比4%増の86例で、大阪市西部1.20、中河内0.65、豊能0.59である。
インフルエンザは30%減の1,381例で、定点あたり報告数は4.57であった。大阪市西部8.47、南河内7.21、堺市5.00となり、全てのブロックで減少が続いている。

インフルエンザ

(定点あたり報告数)

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(定点あたり報告数)

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第9週2月25日～3月3日)

第9週の順位	第8週の順位	感染症	2019年第9週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第9週の定点あたり報告数	2019年第9週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.60	6%減	5.02	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.76	8%増	2.30	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.99	15%増	0.55	1歳_38%
4	5	咽頭結膜熱	0.48	27%増	0.21	1歳_21%
5	4	伝染性紅斑	0.43	4%増	0.04	5歳6歳_20%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	4.57	30%減	15.09	20歳以上_22%

第9週のコメント

～風しん～ 風しんの患者数は、2013年の流行以降、年々減少していましたが、現在、府内でも風しん患者が増えています。

全数把握感染症

風しん

風しんは、潜伏期間は2～3週間 (平均16～18日) で、発熱、発しん、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹性疾患である。妊婦 (妊娠20週頃まで) が風しんにかかると、胎児が風しんウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達遅れ等の障害をもつ可能性がある (先天性風しん症候群)。感染の予防には、2回の風しん含有ワクチン接種が有効である。特に、妊娠する可能性がある女性、妊婦や妊婦の家族と接触する可能性がある方、風しん含有ワクチンの定期接種が行われていなかった世代などに当たる30～50歳代男性について、風しんの感染拡大や先天性風しん症候群の発生を防止するため、抗体検査のうえ、ワクチン接種が勧められている。

感染疫学センターはこちら(外部リンク)
風疹とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第9週2月25日～3月3日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州市	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1	1							10
4類感染症	オウム病	2		2						2
5類感染症 (麻しん、風しん除く)	アムニオニオシス	1						1		5
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1						1		3
	前症型溶血性レンサ球菌感染症	2		1		1				33
	後天性免疫不全症候群	1							1	20
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1		1						15
	侵襲性肺炎球菌感染症	1						1		43
	梅毒	13	1		1	1		1	10	174
	パンコマイシン耐性腸球菌感染症	2		1					1	8
	百日咳	18	4	1		2	1	3	7	170
	結核	結核 新登録患者数: 172名 (内 肺-喀痰塗抹陽性 59名)								
(2018年12月分)	(府内累積報告数 1,845名、内 肺-喀痰塗抹陽性 715名)									
麻しん	15名	(豊能 2名、北河内 1名、大阪市 12名、府内累積報告数 72名)								
風しん、麻しん	7名	(堺市 3名、泉州 1名、大阪市 3名、府内累積報告数 102名)								

(2019年3月5日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第10週 (3月4日～3月10日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加」

第10週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,589例であり、前週比6.4%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ17.06、2.95、1.13、0.42、0.36であった。
感染性胃腸炎は前週比7%増の1,405例で、泉州13.14、南河内9.75、北河内7.22、中河内6.85、大阪市西部6.70である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比7%増の586例で、南河内5.38、堺市4.42、北河内3.44、大阪市西部3.40、中河内3.30であった。
RSウイルス感染症は前週比14%増の225例で、北河内1.96、大阪市西部1.90、大阪市北部1.79、中河内1.25、泉州1.24である。
伝染性紅斑は前週比3%減の83例で、中河内0.90、豊能0.59、三島・大阪市東部0.47である。
咽頭結膜熱は前週比25%減の71例で、中河内1.25、泉州0.52、堺市0.47であった。
インフルエンザは30%減の964例で、定点あたり報告数は3.18であった。南河内5.42、大阪市西部5.00、北河内3.41、豊能3.03となり、全てのブロックで減少が続いている。

RSウイルス感染症

(定点あたり報告数)

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(定点あたり報告数)

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第10週3月4日～3月10日)

第10週の順位	第9週の順位	感染症	2019年第10週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第10週の定点あたり報告数	2019年第10週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.06	7%増	5.10	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.95	7%増	1.99	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	1.13	14%増	0.58	1歳未満_41%
4	5	伝染性紅斑	0.42	3%減	0.06	4歳6歳_25%
5	4	咽頭結膜熱	0.36	25%減	0.24	2歳_24%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告数)	3.18	30%減	10.09	20歳以上_25%

第10週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期間は通常5～10日であり、かぜ様症状で始まり (カタル期)、百日咳特有の咳が出始める (痙攣期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗生薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更された。国内では乳幼児以外の報告数が増加している。

感染疫学センターはこちら(外部リンク)
百日咳とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第10週3月4日～3月10日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州市	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1	1							11
4類感染症	デング熱	1							1	6
	レジオネラ症 (肺炎型)	1						1		6
5類感染症	アムニオニオシス	1						1		7
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1			1					36
	クリプトスポリジウム症	1							1	1
	前症型溶血性レンサ球菌感染症	1							1	12
	侵襲性肺炎球菌感染症	5	1					1	2	49
	梅毒	10		1	1	1				7
	百日咳	19	2		2	4	3	1	7	197
	風しん	8			1	1				6
	麻しん	3	1	1						1
	結核	結核 新登録患者数: 136名 (内 肺-喀痰塗抹陽性 53名)								
(2019年1月分)	(府内累積報告数 136名、内 肺-喀痰塗抹陽性 53名)									

(2019年3月12日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第11週 (3月11日~3月17日)

今週のコメント
~RSウイルス感染症~咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加続く」

第11週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,587例であり、前週比0.1%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.06、2.69、1.15、0.48、0.40であった。
感染性胃腸炎は前週比ほぼ不変の1,405例で、南河内10.69、泉州9.90、中河内8.45、豊能8.14、大阪市北部7.07である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%減の536例で、南河内5.13、中河内3.65、北河内3.37、堺市3.16、泉州2.57であった。
RSウイルス感染症は1%増の228例で、北河内1.82、大阪市北部1.71、大阪市南部1.61、中河内1.55、大阪市西部1.40である。
咽頭結膜熱は34%増の95例で、中河内1.55、泉州0.62、北河内0.59であった。
伝染性紅斑は4%減の80例で、豊能0.68、中河内0.60、北河内0.59である。
インフルエンザは42%減の559例で定点あたり報告数は1.85である。南河内9.71、泉州2.12、豊能2.03、大阪市西部1.87であった。

RSウイルス感染症

感染性胃腸炎

第11週の順位	第10週の順位	感染症	2019年第11週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第11週の定点あたり報告数	2019年第11週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.06	増減なし	5.32	1歳_13%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.69	9%減	1.95	6歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.15	1%増	0.57	1歳_36%
4	5	咽頭結膜熱	0.48	34%増	0.21	1歳_20%
5	4	伝染性紅斑	0.40	4%減	0.02	7歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.85	42%減	6.16	20歳以上_26%

第11週のコメント

~侵襲性髄膜炎菌感染症~ 大阪府では、毎年2-4例の報告があります。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌 (Neisseria meningitidis) による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2~10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜炎症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群 (DIC) を生ずる。髄膜炎ベルト (meningitis belt) とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セファロスポリン系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リアンビンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌 (血清型 A, C, Y, W-135) ワクチンの任意接種が開始されている。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	大阪府	府内累積報告数
3類感染症											
4類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)	3	1	1						1	9
5類感染症	アメーバ赤痢	2				1	1				10
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1									1
	後天性免疫不全症候群	2								2	23
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1							1		3
	侵襲性肺炎球菌感染症	5	1	2						2	57
	梅毒	15		1	2	1	1	1		10	219
	百日咳	12	1	1	1	1	3		1	4	216
風しん	3	1				1		1	1	87	
麻疹	2								1	1	109
結核 (2019年1月分)	結核 新登録患者数: 136名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 53名) (府内累積報告数 136名、内 肺・喀痰塗抹陽性 53名) (2019年3月19日 集計分)										

* 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第12週 (3月18日~3月24日)

今週のコメント
~RSウイルス感染症~咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加さらに続く」

第12週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,320例であり、前週比10.3%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.15、2.30、1.24、0.51、0.47である。
感染性胃腸炎は前週比13%減の1,223例で、南河内9.25、泉州8.76、中河内7.75、北河内6.82、豊能6.77であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は15%減の458例で、南河内4.94、中河内3.35、大阪市南部3.11、堺市2.42、泉州2.33であった。
RSウイルス感染症は8%増の247例で、大阪市北部2.86、北河内1.93、大阪市南部1.44、大阪市西部1.40、南河内1.31であった。
伝染性紅斑は26%増の101例で、大阪市北部1.14、中河内0.95、豊能0.68である。
咽頭結膜熱は2%減の93例で、中河内1.85、北河内0.67、三島0.47であった。
インフルエンザは10%減の504例で、定点あたり報告数は1.66である。南河内5.13、大阪市東部1.82、泉州1.68、大阪市西部1.60であった。

RSウイルス感染症

伝染性紅斑

第12週の順位	第11週の順位	感染症	2019年第12週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第12週の定点あたり報告数	2019年第12週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.15	13%減	4.84	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.30	15%減	1.91	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	1.24	8%増	0.45	1歳未満_34%
4	5	伝染性紅斑	0.51	26%増	0.02	5歳_19%
5	4	咽頭結膜熱	0.47	2%減	0.22	1歳_24%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.66	10%減	3.14	20歳以上_26%

第12週のコメント

~麻しん~ ワクチンで予防可能な感染症です。2019年、大阪府内の累積感染者数は116例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん (はしか) は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う急性ウイルス感染症で、感染すると高熱と結核炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力 (一人の患者が12~18人に感染伝播) のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が必要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状 (発熱、せき、鼻水、眼結膜の充血、発しん等) があり、1) 1か月以内に麻しん患者と接触した場合、2) 麻しん流行国 (主にアジア及びアフリカ諸国) に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン (1歳以上で2回) で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[麻疹とは\(国立感染症研究所\)](#)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	大阪府	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1	1								13
4類感染症	A型肝炎	1								1	8
	マラリア (熱帯熱)	1							1	1	1
	レジオネラ症 (肺炎型)	2								2	11
5類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1		1							40
	新変種溶血性レンサ球菌感染症	1				1					13
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2							2		17
	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1	63
	梅毒	10	1							9	241
	百日咳	9	1		1	2			2	3	231
	風しん	5				1				4	92
麻しん	6	3						1	2	116	
結核 (2019年2月分)	結核 新登録患者数: 141名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 62名) (府内累積報告数 276名、内 肺・喀痰塗抹陽性 116名) (2019年3月26日 集計分)										

* 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第13週 (3月25日～3月31日)

今週のコメント
～感染性胃腸炎～手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 減少」

第13週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,206例であり、前週比4.9%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.51、2.15、1.15、0.50、0.47であった。
感染性胃腸炎は前週比10%減の1,096例で、南河内8.81、泉州7.67、大阪市西部6.50、大阪市南部6.44、北河内5.70である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比7%減の428例で、南河内4.13、北河内・堺市2.74、中河内2.60、大阪市南部2.50であった。
RSウイルス感染症は前週比8%減の228例で、大阪市北部2.43、北河内1.82、大阪市西部1.60、南河内1.38、泉州1.24である。
伝染性紅斑は前週比1%減の100例で、豊能1.00、中河内0.85、北河内0.63であった。
咽頭結膜熱は前週と同数の93例で、北河内0.89、泉州0.86、中河内0.65である。
インフルエンザは31%減の346例で、定点あたり報告数は1.14であった。南河内2.17、豊能1.41、泉州1.24、中河内1.19、堺市1.17である。

感染性胃腸炎

伝染性紅斑

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第13週3月25日～3月31日)

第13週の順位	第12週の順位	感染症	2019年 第13週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第13週の 定点あたり 報告数	2019年第13週の 年動向 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.51	10%減	5.18	2歳_13%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.15	7%減	1.74	5歳_13%
3	3	RSウイルス感染症	1.15	8%減	0.35	1歳未満_38%
4	4	伝染性紅斑	0.50	1%減	0.06	4歳6歳_17%
5	5	咽頭結膜熱	0.47	増減なし	0.27	2歳_26%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.14	31%減	1.91	20歳以上_29%

第13週のコメント

～麻しん～ ワクチンで予防可能な感染症です。2019年、大阪府内の累積感染者数は128例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん(はしか)は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発疹性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発疹が出現する。潜伏期間は1-2週間である。麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年2月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状(発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発疹等)があり、1) 1か月以内に麻しん患者と接触していた場合、2) 麻しん流行国(主にアジア及びアフリカ諸国)に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診の際、医療機関に事前連絡し、麻しん疑い受診を指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン(1歳以上で2回)で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[麻疹とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第13週3月25日～3月31日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
3類感染症	報告はありません										
4類感染症	A型肝炎	1	1								9
	デング熱(1型)	1								1	8
5類感染症	アムール赤痢	1								1	11
	カルバペナム耐性細菌科細菌感染症	3				1	2				43
	後天性免疫不全症候群	5						1	1	3	34
	慢性的インフルエンザ感染症	1								1	19
	慢性的肺炎球菌感染症	3						1	1	2	68
梅毒	9			1	1				2	14	260
百日咳	8	1		1	1	1	1	1	3	243	
風しん	2									2	96
麻しん	5	1							3	1	128
結核 (2019年2月分)	結核 新登録患者数: 141名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 62名) (府内累積報告数 276名、内 肺・喀痰塗抹陽性 116名)										

(2019年4月2日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第14週 (4月1日～4月7日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少続く」

第14週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,079例であり、前週比5.8%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱・手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.33、1.85、1.01、0.52、0.43-0.43であった。
感染性胃腸炎は前週比3%減の1,061例で、南河内8.63、中河内7.65、大阪市西部7.60、大阪市南部5.83、北河内5.74である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比14%減の369例で、南河内3.38、北河内2.63、中河内2.25であった。
RSウイルス感染症は前週比12%減の201例で、大阪市西部2.20、大阪市南部1.56、北河内1.52である。
伝染性紅斑は前週比3%増の103例で、中河内1.35、大阪市北部0.71、大阪市南部0.61であった。
咽頭結膜熱は前週比9%減の85例で、中河内0.90、北河内0.85、泉州0.76である。
手足口病は前週比5%増の85例で、北河内1.41、中河内0.85、大阪市南部0.67である。
インフルエンザは18%減の285例で、定点あたり報告数は0.94で1.00を下回った。北河内1.71、大阪市北部1.65、泉州0.97、堺市0.90、大阪市西部0.87である。

インフルエンザ

伝染性紅斑

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第14週4月1日～4月7日)

第14週の順位	第13週の順位	感染症	2019年 第14週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第14週の 定点あたり 報告数	2019年第14週の 年動向 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.33	3%減	4.97	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.85	14%減	1.68	5歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.01	12%減	0.43	1歳未満_47%
4	4	伝染性紅斑	0.52	3%増	0.05	6歳_19%
5	6	手足口病	0.43	5%増	0.05	1歳_40%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.94	18%減	0.86	20歳以上_32%

第14週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2018年の梅毒感染者数は、1100例を超えました

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の感染者は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2018年の感染者数は、1100例を超え、前年比1.4倍を上回った。感染経路が施行された1999年以降、最も多く報告されている。梅毒は、性行為・オラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の細かな傷口が原因で体内に侵入し感染する。また、妊婦時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗真菌薬の投与で治療が期待できる。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[梅毒とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第14週4月1日～4月7日)

*) 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症 3 3										
4類感染症	A型肝炎	1								1	10
	レジオネラ症(肺炎型)	1		1							13
5類感染症	アムール赤痢	1						1			13
	耐性型溶血性レンサ球菌感染症	2							2		16
	後天性免疫不全症候群	2								2	37
	慢性的肺炎球菌感染症	3							1	2	76
	水痘(入院例)	1		1							7
梅毒	8	1		1	1	2			5	278	
百日咳	10		1	1		1	1	3	3	261	
風しん	5		1							4	103
結核 (2019年2月分)	結核 新登録患者数: 141名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 62名) (府内累積報告数 276名、内 肺・喀痰塗抹陽性 116名)										

(2019年4月9日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第15週 (4月8日～4月14日)

今週のコメント
～手足口病～手洗いの励行と排せつ物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 増加」

第15週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は2,665例であり、前週比28.2%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.10、2.40、1.18、0.82、0.60であった。

感染性胃腸炎は前週比32%増の1,398例で、南河内2.00、中河内9.70、北河内8.41、大阪市南部8.06、大阪市西部7.80である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は28%増の472例で、南河内6.25、中河内3.35、泉州2.80であった。

RSウイルス感染症は16%増の233例で、泉州2.30、南河内2.19、北河内1.44である。

手足口病は前週比89%増の161例で、北河内2.74、中河内1.60、大阪市東部1.27である。

伝染性紅斑は15%増の118例で、大阪市北部1.23、北河内1.11、中河内1.00であった。

インフルエンザは15%増の328例で、定点あたり報告数は1.09と1.00を上回った。北河内1.98、大阪市西部1.60、中河内1.45である。

手足口病

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第15週4月8日～4月14日)

第15週 の順位	第14週 の順位	感染症	2019年 第15週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第15週の 定点あたり 報告数	2019年第15週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	7.10	32%増	6.79	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.40	28%増	1.76	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	1.18	16%増	0.55	1歳未満_46%
4	5	手足口病	0.82	89%増	0.05	1歳_49%
5	4	伝染性紅斑	0.60	15%増	0.09	5歳_22%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.09	15%増	0.73	20歳以上_22%

第15週のコメント

～風しん～ 風しんの患者数は、2013年の流行以降、年々減少していましたが、現在、府内でも風しん患者が増えています。

全数把握感染症

風しん

風しんは、潜伏期間は2～3週間(平均16～18日)で、発熱、発しん、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹症である。妊婦(妊娠20週頃まで)が風しんにかかる、胎児が風しんウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達遅れ等の障害をもつ可能性がある(先天性風しん症候群)。感染の予防には、2回の風しん含有ワクチン接種が有効である。特に、妊娠する可能性がある女性、妊婦や妊婦の家族と接触する可能性がある方、風しん含有ワクチンの定期接種が行われていなかった世代などに当たる30～50歳代男性について、風しんの感染拡大や先天性風しん症候群の発生を防ぐため、抗体検査やワクチン接種が勧められている。

感染症疫学センターはこちら(外部リンク)
風疹とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第15週4月8日～4月14日)

* 注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉	大阪府	報告数 累計
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2	2							16
4類感染症	レジオネラ症(肺炎型)	1		1						14
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2					1		1	50
	クロイツフェルト-ヤコブ病	1								1
	後天性免疫不全症候群	1								1
	後天性免疫不全症候群	1								39
	慢性的インフルエンザ菌感染症	1		1						21
	慢性的肺炎球菌感染症	3		1					1	84
	水痘(入院例)	1				1				8
	梅毒	13	1			1	1			10
	パングマイシン耐性腸球菌感染症	1		1						9
	百日咳	6		1		3				2
風しん	4								4	
風しん	2	1							1	
結核	結核 新登録患者数: 141名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 62名)								
(2019年2月分)		(府内累積報告数 276名、内 肺・喀痰塗抹陽性 116名)								

(2019年4月16日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第16週 (4月15日～4月21日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 2週連続増加、注意」

第16週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は3,166例であり、前週比18.8%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.41、2.86、1.31、1.24、0.80であった。

感染性胃腸炎は前週比19%増の1,657例で、大阪市北部13.39、中河内11.80、大阪市南部9.72、北河内9.52、三島8.82である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比19%増の563例で、南河内6.44、大阪市南部3.61、泉州3.50であった。

RSウイルス感染症は前週比11%増の258例で、大阪市西部2.50、大阪市北部1.92、南河内1.88である。

手足口病は前週比52%増の245例で、北河内3.74、中河内2.70、大阪市東部1.33であった。

伝染性紅斑は前週比34%増の158例で、北河内1.74、大阪市北部1.54、中河内1.00である。

インフルエンザは96%増の644例で、定点あたり報告数は2.14であった。大阪市西部2.80、大阪市東部2.77、北河内2.62、南河内2.58である。

インフルエンザ

手足口病

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第16週4月15日～4月21日)

第16週 の順位	第15週 の順位	感染症	2019年 第16週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第16週の 定点あたり 報告数	2019年第16週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	8.41	19%増	7.85	1歳_18%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.86	19%増	2.17	4歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.31	11%増	0.47	1歳未満_41%
4	4	手足口病	1.24	52%増	0.04	1歳_43%
5	5	伝染性紅斑	0.80	34%増	0.06	5歳_23%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	2.14	96%増	0.66	10-14歳_20%

第16週のコメント

～アメーバ赤痢～ 発展途上国に渡航される方は、生水、氷に注意し、野菜、肉類を生で喫食しないようにしましょう

全数把握感染症

アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、原虫である赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica*) を病原体とする感染症である。世界で、約5億人が感染し、毎年約4-7万人が死亡している。発展途上国への渡航者によくみられる感染症だが、国内では男性同性性行為前での感染が多い。感染経路として、汚染された飲食物による経口感染や性的接触による感染がある。大腸粘膜面に潰瘍性病変を形成し、粘血便を主体とする赤痢アメーバ性大腸炎を発症させる。大腸炎症例のうち5%ほどが腸管外病変を形成し、大部分は肝臓病である。

感染症疫学センターはこちら(外部リンク)
アメーバ赤痢とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第16週4月15日～4月21日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉	大阪府	報告数 累計
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2	1						1	21
4類感染症	Dengue熱	2								2
	レジオネラ症(肺炎型)	1		1						15
5類感染症	アメーバ赤痢	4	1	1	1	1				18
	ウイルス性肝炎	1		1						6
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1					1			52
	後天性免疫不全症候群	1							1	43
	慢性的インフルエンザ菌感染症	1	1							24
	慢性的肺炎球菌感染症	7	1	1	1	1	1	2	1	95
	梅毒	12			2	1	1		1	7
	百日咳	4		1		1	1	1		289
	風しん	1		1						111
	風しん	1								1
結核	結核 新登録患者数: 141名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 62名)								
(2019年2月分)		(府内累積報告数 276名、内 肺・喀痰塗抹陽性 116名)								

(2019年4月23日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第17週 (4月22日～4月28日)

今週のコメント
～手足口病～手洗いの励行、排せつ物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 5週連続増加」

第17週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,382例であり、前週比6.8%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ18.62、2.91、1.85、1.02、0.75であった。

感染性胃腸炎は前週比2%増の1,698例で、北河内13.11、南河内11.81、大阪市北部10.46、大阪市南部8.83、豊能8.27である。

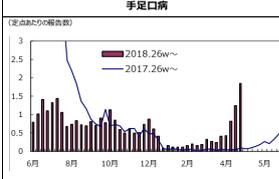
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比2%増の574例で、南河内8.81、北河内3.44、大阪市南部3.17であった。手足口病は前週比49%増の365例で、北河内6.00、中河内3.10、大阪市北部2.92であった。

RSウイルス感染症は前週比22%減の201例で、南河内2.31、大阪市西部2.30、北河内1.15であった。咽頭結膜熱は前週比36%増の148例で、中河内1.25、泉州1.00、北河内0.89である。

インフルエンザは18%増の760例で、定点あたり報告数は2.53であった。南河内3.29、北河内3.24、豊能3.21であった。

手足口病

(定点あたり報告数)



インフルエンザ

(定点あたり報告数)

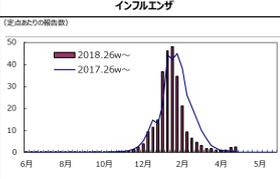


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第17週4月22日～4月28日)

第17週 の順位	第16週 の順位	感染症	2019年 第17週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第17週の 定点あたり 報告数	2019年第17週の 年齢別 患者発生数 総大割合値
1	1	感染性胃腸炎	8.62	2%増	8.19	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.91	2%増	2.59	4歳_14%
3	4	手足口病	1.85	49%増	0.09	1歳_46%
4	3	RSウイルス感染症	1.02	22%減	0.41	1歳_37%
5	6	咽頭結膜熱	0.75	36%増	0.39	1歳_25%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	2.53	18%増	0.41	10-14歳_22%

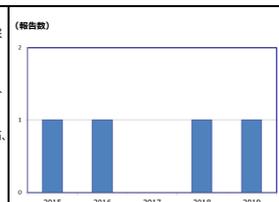
第17週のコメント

～レプトスピラ症～ 大阪では、毎年、1例の発生報告があります

全数把握感染症

レプトスピラ症

レプトスピラ症は、病原性レプトスピラ感染に起因する感染症である。病原性レプトスピラは保菌動物の腎臓に保菌され、尿中に排菌される。保菌動物として、げっ歯類をはじめ多くの野生動物や家畜（ウシ、ウマ、ブタなど）、ペット（イヌ、ネコなど）が挙げられている。ヒトは、保菌動物の尿で汚染された水、土壌、尿との直接的な接触によって経皮的に感染する。レプトスピラ症は急性熱性疾患であり、軽症型から、黄疸、出血、腎障害を伴う重症型（ワイル病）まで多彩な症状を示す。5～14日間の潜伏期を経て、発熱、悪寒、頭痛、筋痛、腹痛、結膜充血などが生じ、第4～6病日に黄疸、出血傾向が増強する。近年、海外渡航者が増加し、流行地域からの輸入感染例の報告も増加し、注意が必要である。



[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[レプトスピラ症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第17週4月22日～4月28日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内 累計 報告数
3類感染症	報告はありません									
4類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)	1								1
	レプトスピラ症	1	1							16
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1							1	54
	優酸性腸炎菌感染症	1				1				2
	優酸性肺炎球菌感染症	6			1		1	2	2	103
	梅毒	8	3		1				1	3
	パンコマイン耐性腸球菌感染症	1				1				9
	百日咳	9	2		2		2		1	2
	風しん	1			1					1
麻疹	4	2							2	
結核 (2019年2月分)	結核 新登録患者数：141名 (内 肺-喀痰塗抹陽性 62名) (府内累計報告数 276名、内 肺-喀痰塗抹陽性 116名)									

(2019年5月7日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第18週 (4月29日～5月5日) ～2019年 第19週 (5月6日～5月12日)

今週のコメント
～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 非流行期へ」

第18週と第19週を合わせて報告する。大型連休のため医療機関の診療実日数の減少を考慮する必要がある。

第18週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,041例であり、前週比69.2%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.39、0.84、0.65、0.47、0.23であった。

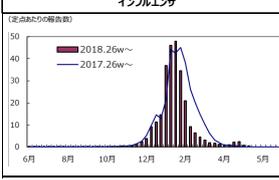
第19週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,289例であり、前週比119.9%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、咽頭結膜熱、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ15.32、2.27、1.05、0.67、0.67であった。

第19週のインフルエンザは前週比28%減の192例で、定点あたり報告数は0.64と2週連続で1.00を下回り、非流行期となった。

第19週は、ほとんどの疾患の報告数が前週より増加したが、インフルエンザ、RSウイルスは減少している。

インフルエンザ

(定点あたり報告数)



伝染性紅斑

(定点あたり報告数)

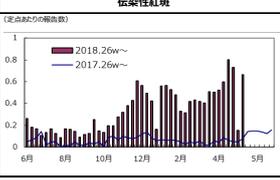


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第19週5月6日～5月12日)

第19週 の順位	第18週 の順位	感染症	2019年 第19週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第19週の 定点あたり 報告数	2019年第19週の 年齢別 患者発生数 総大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.32	123%増	8.20	1歳_16%
2	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.27	253%増	2.55	5歳_12%
3	2	手足口病	1.05	25%増	0.09	1歳_43%
4	6	咽頭結膜熱	0.67	214%増	0.74	1歳_37%
5	8	伝染性紅斑	0.67	337%増	0.08	5歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.64	28%減	0.13	20歳以上_26%

第19週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり(カタル期)、百日咳特有の咳が出始める(痉咳期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。



[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[百日咳とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第19週5月6日～5月12日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内 累計 報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症									
4類感染症	デング熱	1							1	12
	レジオネラ症 (非レジオネラ型)	2		1						21
5類感染症	アムニオニオシス	1							1	22
	急性遷延性疼痛	1				1				2
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	1							3
	後天性免疫不全症候群	1								1
	優酸性インフルエンザ菌感染症	2		1						1
	優酸性肺炎球菌感染症	1					1			120
	水痘 (入院例)	1							1	9
	梅毒	14	1	1	2	1	1			8
	百日咳	9	3	1				2	1	2
	風しん	1								1
麻疹	1								1	
結核 (2019年3月分)	結核 新登録患者数：153名 (内 肺-喀痰塗抹陽性 53名) (府内累計報告数 425名、内 肺-喀痰塗抹陽性 164名)									

(2019年5月14日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第20週 (5月13日～5月19日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排せつ物の適切な処理が重要

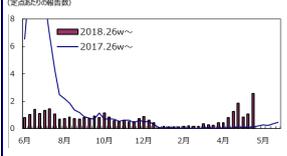
定点把握感染症

「手足口病 増加」

第20週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,993例であり、前週比30.8%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.72、3.08、2.55、0.85、0.53であった。
感染性胃腸炎は前週比26%増の1,324例で、南河内10.25、大阪市北部9.85、中河内9.10、北河内7.30、豊能7.09である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比35%増の607例で、南河内8.38、北河内3.37、大阪市西部3.20であった。手足口病は前週比143%増の502例で、南河内5.63、中河内3.40、堺市3.11である。
伝染性紅斑は前週比28%増の168例で、北河内1.70、泉州1.15、豊能0.91であった。
咽頭結膜熱は前週比21%減の104例で、北河内1.00、大阪市北部・南河内0.69である。

インフルエンザは第19週に非流行期となったため、記載を省略しました。

手足口病



伝染性紅斑

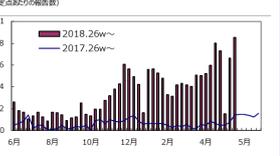


表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第20週5月13日～5月19日)

第20週 の順位	第19週 の順位	感染症	2019年 第20週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第20週の 定点あたり 報告数	2019年第20週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.72	26%増	8.94	1歳_18%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.08	35%増	3.00	3歳_14%
3	3	手足口病	2.55	143%増	0.13	1歳_54%
4	5	伝染性紅斑	0.85	28%増	0.14	5歳_20%
5	4	咽頭結膜熱	0.53	21%減	0.86	1歳_26%

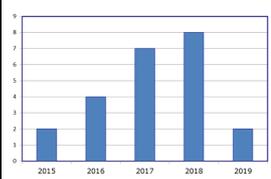
第20週のコメント

～細菌性赤痢～ 大阪府では、毎年2～8例、報告されている。

全数把握感染症

細菌性赤痢

細菌性赤痢は、赤痢菌を病原体とする感染症である。患者や保菌者の糞便、汚染された手指、食品、水、器物を介して感染拡大する。最近は輸入感染例が主であり、推定感染地は東南アジア、南アジアが多い。潜伏期1～3日で発症し、全身の倦怠感、悪寒を伴う急激な発熱、水様性下痢を呈する。発熱は1～2日続き、腹痛、しびり腹、膿状血便などの症状がある。フルオロキノロン系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[細菌性赤痢とは\(国立感染症研究所\)](#)

表 2. 大阪府全数報告数 (2019年 第20週5月13日～5月19日)
注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内 累積 報告数
3類感染症										
細菌性赤痢 (<i>S. flexneri</i> , <i>S. sonnei</i>)	2	2								2
腸管出血性大腸菌感染症	4		1						1	26
4類感染症										
Dengue熱 (1型)	1								1	14
レジオネラ症 (肺炎型)	2						2			24
5類感染症										
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1					1				60
新変種溶血性レンサ球菌感染症	1					1				19
慢性的肺炎球菌感染症	8			2	1	1	1			333
水痘 (入院例)	1			1						10
梅毒	6					1				5,400
パロマイコチン耐性球菌感染症	1									1,11
百日咳	15	3	3	1	1	1	1	2	3	364
風しん	1			1						115
麻疹	5		1							4,141
結核 (2019年3月分)	結核 新登録患者数: 153名	(内) 肺・喀痰塗抹陽性 53名								
		(府内累積報告数 425名、内 肺・喀痰塗抹陽性 164名)								

(2019年5月21日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第21週 (5月20日～5月26日)

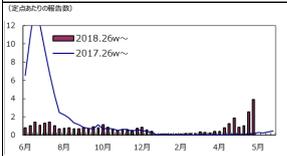
今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排せつ物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 増加続く」

第21週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,417例であり、前週比14.2%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.91、3.92、3.03、0.76、0.76であった。
感染性胃腸炎は前週比3%増の1,362例で、大阪市北部1.00、南河内10.50、豊能8.27、北河内8.04、中河内7.85である。
手足口病は前週比54%増の772例で、南河内10.06、泉州5.05、堺市5.00、北河内4.67、中河内4.55であった。南河内、泉州、堺市は警報レベル開始基準値5以上である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比2%減の596例で、南河内5.56、大阪市南部4.33、北河内3.96、中河内3.50である。
伝染性紅斑は前週比11%減の150例で、北河内1.52、泉州1.05、中河内0.95であった。
咽頭結膜熱は前週比43%増の149例で、中河内1.20、堺市1.11、北河内1.04、南河内1.00である。

手足口病



伝染性紅斑

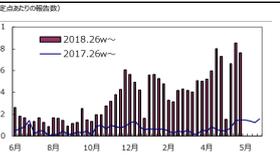


表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第21週5月20日～5月26日)

第21週 の順位	第20週 の順位	感染症	2019年 第21週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第21週の 定点あたり 報告数	2019年第21週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.91	3%増	9.36	1歳_17%
2	3	手足口病	3.92	54%増	0.19	1歳_46%
3	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.03	2%減	3.11	4歳_16%
4	4	伝染性紅斑	0.76	11%減	0.15	5歳_19%
5	5	咽頭結膜熱	0.76	43%増	1.02	1歳_49%

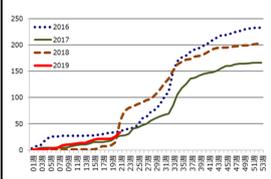
第21週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO157、O26、O111がある。汚染された食肉を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こす場合がある。3～5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6～7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表 2. 大阪府全数報告数 (2019年 第21週5月20日～5月26日)
注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内 累積 報告数
3類感染症										
腸管出血性大腸菌感染症	8		1	3					1	34
腸チフス	1				1					3
4類感染症										
E型肝炎	1		1							3
マリア (熱帯熱)	1									1,2
レジオネラ症 (肺炎型)	1									1,26
5類感染症										
アメーバ赤痢	3					1				2,25
ウイルス性肝炎	1			1						7
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1		1		1			65
急性脳炎	1			1						11
後天性免疫不全症候群	2								2	50
慢性的肺炎球菌感染症	6		1	1			2			2,141
梅毒	11	1					1			9,425
百日咳	12	3		3	2	1	1	1	1	383
麻疹	1			1						142
結核 (2019年3月分)	結核 新登録患者数: 153名	(内) 肺・喀痰塗抹陽性 53名								
		(府内累積報告数 425名、内 肺・喀痰塗抹陽性 164名)								

(2019年5月28日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第22週 (5月27日～6月2日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排せつ物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「夏型感染症 (手足口病、ヘルパンギーナ) 増加」

第22週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,584例であり、前週比4.9%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ16.79、4.72、3.37、0.71、0.66である。

感染性胃腸炎は前週比2%減の1,338例で、南河内10.31、豊能8.86、大阪市北部9.00、大阪市南部8.11、北河内7.41であった。

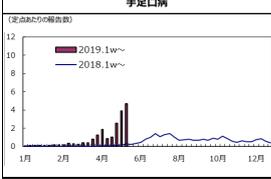
手足口病は前週比20%増の930例で、南河内8.63、泉州7.95、大阪市北部5.77、堺市5.26、中河内5.20である。大阪市北部、中河内が新たに警報レベル開始基準値5以上となった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比11%増の663例で、南河内6.75、北河内4.19、中河内4.00、堺市3.95である。

ヘルパンギーナは前週比25%増の140例で、大阪市北部1.92、泉州1.30、堺市1.00であった。

伝染性紅斑は前週比14%減の129例で、泉州1.10、中河内1.00、大阪市南部0.89である。

手足口病



ヘルパンギーナ

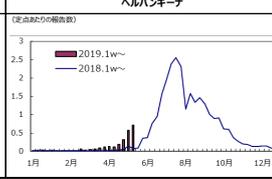


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第22週5月27日～6月2日)

第22週の順位	第21週の順位	感染症	2019年第22週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第22週の定点あたり報告数	2019年第22週の年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.79	2%減	8.07	1歳_15%
2	2	手足口病	4.72	20%増	0.28	1歳_48%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.37	11%増	3.28	4歳_16%
4	6	ヘルパンギーナ	0.71	25%増	0.08	1歳_41%
5	4	伝染性紅斑	0.66	14%減	0.15	5歳_16%

第22週のコメント

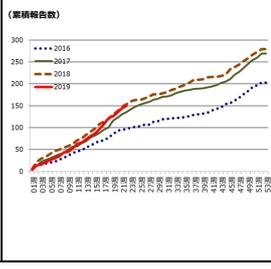
～侵袭性肺炎球菌感染症～ 2018年の累積報告数は、過去4年間で最多でした

全数把握感染症

侵袭性肺炎球菌感染症

侵袭性肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌 (*Streptococcus pneumoniae*) による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。髄膜炎、菌血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗菌薬が有効であるが、近年薬剤耐性菌も多く報告されている。侵袭性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[髄管出血性大腸菌とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第22週5月27日～6月2日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4		1					3	41	
4類感染症	A型肝炎	1							1	11	
	つつが虫病	1							1	1	
5類感染症	後天性免疫不全症候群	2							2	54	
	サルモネラ症	1		1						4	
	侵袭性インフルエンザ菌感染症	2		1	1					28	
	侵袭性肺炎球菌感染症	6	3	2						150	
	梅毒	12	1		2					9	448
	百日咳	11	2	1	3		3	2		402	
	風しん	1		1						116	
結核	結核 新登録患者数：134名 (内 肺・病変非特異性 51名)										
(2019年4月分)	(府内累積報告数 555名、内 肺・病変非特異性 216名)										

(2019年6月4日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第23週 (6月3日～6月9日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病、警報レベルを超える」

第23週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は4,098例であり、前週比14.3%増であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.09、6.34、3.32、1.33、0.86である。

手足口病は前週比50%増の1,397例で、南河内17.38、泉州10.20、大阪市北部9.31、大阪市南部7.06、堺市7.05であった。府内全ブロックで増加しており大阪市南部、北河内、大阪市西部が新たに警報レベル開始基準値5を超える。コフサッキーウイルスA6が優位に検出された。

感染性胃腸炎は7%減の1,249例で、南河内9.88、豊能8.68、大阪市北部8.23、北河内6.82、大阪市南部6.56である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の653例で、南河内5.94、中河内5.10、大阪市南部4.61、堺市4.53であった。

ヘルパンギーナは87%増の262例で、大阪市北部3.00、泉州2.45、堺市1.90である。

伝染性紅斑は32%増の170例で、北河内1.37、泉州1.30、堺市1.05であった。

手足口病



ヘルパンギーナ

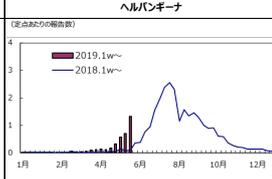


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第23週6月3日～6月9日)

第23週の順位	第22週の順位	感染症	2019年第23週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第23週の定点あたり報告数	2019年第23週の年齢別患者発生数最大割合
1	2	手足口病	7.09	50%増	0.22	1歳_43%
2	1	感染性胃腸炎	6.34	7%減	7.72	1歳_16%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.32	2%減	3.23	4歳_15%
4	4	ヘルパンギーナ	1.33	87%増	0.10	1歳_38%
5	5	伝染性紅斑	0.86	32%増	0.14	4歳_18%

第23週のコメント

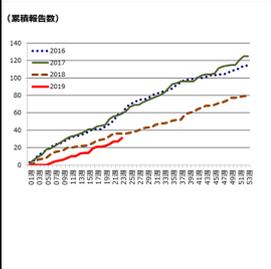
～アメーバ赤痢～ 発展途上国に渡航される方は、生水、氷に注意し、野菜、肉類を生で喫食しないようにしよう

全数把握感染症

アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、原虫である赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica*) を病原体とする感染症である。世界で、約5億人が感染し、毎年約4-7万人が死亡している。発展途上国への渡航者によくみられる感染症だが、国内では男性同性愛者間での感染が多い。感染経路として、汚染された飲食物による経口感染や性的接触による感染がある。大腸粘膜面に潰瘍性病変を形成し、粘血便を主体とする赤痢アメーバ性大腸炎を発症させる。大腸炎症例のうち5%ほどが腸管外病変を形成し、大部分は肝臓病である。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[アメーバ赤痢とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第23週6月3日～6月9日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3		1					2	44
4類感染症	A型肝炎	1					1			11
	レジオネラ症 (肺炎型)	3	1				1			29
5類感染症	アメーバ赤痢	4			1	1			2	31
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1					1	71
	急性脳炎	1							1	12
	前庭器溶血性レンサ球菌感染症	1			1					23
	後天性免疫不全症候群	1							1	55
	侵袭性肺炎球菌感染症	4		1	2				1	155
	梅毒	12			1	1		1	9	471
	パンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	1							12
	百日咳	6			1	1	1	1	2	414
	結核	結核 新登録患者数：134名 (内 肺・病変非特異性 51名)								
(2019年4月分)	(府内累積報告数 555名、内 肺・病変非特異性 216名)									

(2019年6月11日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第24週 (6月10日～6月16日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 府内全域で増加続く」

第24週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は4,648例であり、前週比13.4%増であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で、以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ110.05、5.61、2.86、2.02、0.95であった。

手足口病は前週比42%増の1,979例で、南河内20.38、大阪市北部13.08、泉州12.90、中河内11.25、堺市10.90で、大阪市東部を除く全ブロックで警報レベル開始基準値の5を超えている。

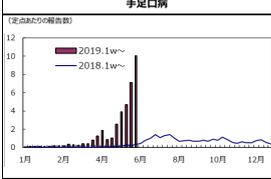
感染性胃腸炎は前週比11%減の1,106例で、南河内10.19、北河内7.11、中河内7.00であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比14%減の564例で、南河内5.38、堺市3.79、中河内3.75である。

ヘルパンギーナは前週比52%増の397例で、大阪市北部4.15、南河内3.25、堺市3.05であった。

伝染性紅斑は前週比11%増の188例で、北河内2.15、泉州1.50、堺市1.37である。

手足口病



ヘルパンギーナ

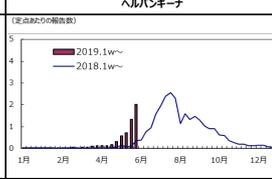


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第24週6月10日～6月16日)

第24週 の順位	第23週 の順位	感染症	2019年 第24週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第24週 の定点あたり 報告数	2019年第24週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	手足口病	10.05	42%増	0.34	1歳_41%
2	2	感染性胃腸炎	5.61	11%減	7.02	1歳_15%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.86	14%減	2.94	4歳_15%
4	4	ヘルパンギーナ	2.02	52%増	0.36	1歳_39%
5	5	伝染性紅斑	0.95	11%増	0.13	5歳_20%

第24週のコメント

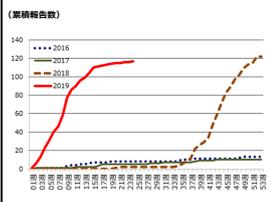
～風しん～ 風しんの患者数は、2013年の流行以降、年々減少していましたが、現在、府内でも風しん患者が報告されています。

全数把握感染症

風しん

風しんは、潜伏期間は2～3週間(平均16～18日)で、発熱、発しん、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹性疾患である。妊婦(妊娠20週頃まで)が風しんにかかると、胎児が風しんウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達遅れ等の障害をもつ可能性がある(先天性風しん症候群)。感染の予防には、2回の風しん含有ワクチン接種が有効である。特に、妊娠する可能性がある女性、妊婦や妊婦の家族と接触する可能性がある方、風しん含有ワクチンの定期接種が行われていなかった世代などに当たる30～50歳代男性について、風しんの感染拡大や先天性風しん症候群の発生を防ぐため、抗体検査やワクチン接種が勧められている。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[風疹とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第24週6月10日～6月16日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報告 数	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1		1						45	
4類感染症	レジオネラ症(肺炎型)	3					1		2	32	
5類感染症	アノーバ赤痢	1		1						33	
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2				1	1			75	
	先天性免疫不全症候群	2							2	60	
	慢性肺炎球菌感染症	1					1			157	
	先天性風しん症候群	1							1	1	
	梅毒	9							2	7	496
	パンコマイシン耐性球菌感染症	1							1	14	
百日咳	11	4		1		2		2	2	427	
風しん	1	1								117	
結核 (2019年4月分)	結核 新登録患者数: 134名										(内 肺・喀痰塗抹陽性 51名)
										(府内累積報告数 555名、内 肺・喀痰塗抹陽性 216名)	
(2019年6月18日 集計分)											

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第25週 (6月17日～6月23日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病、やや減少」

第25週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は4,336例であり、前週比6.7%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で、以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ9.15、5.51、2.59、1.78、1.18であった。

手足口病は前週比9%減の1,803例で、南河内16.44、泉州11.45、大阪市北部10.92、大阪市南部10.44、中河内10.25で、大阪市東部を除く全ブロックで警報レベル開始基準値の5を超えている。

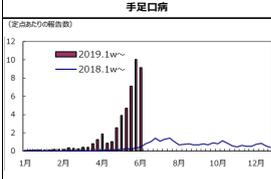
感染性胃腸炎は前週比2%減の1,085例で、南河内10.00、北河内8.48、豊能7.14であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比10%減の510例で、南河内4.13、大阪市南部3.78、北河内3.41である。

ヘルパンギーナは前週比12%減の350例で、大阪市北部3.39、北河内2.41、大阪市西部2.10であった。

伝染性紅斑は前週比24%増の233例で、北河内3.07、泉州1.50、中河内1.45である。

手足口病



ヘルパンギーナ

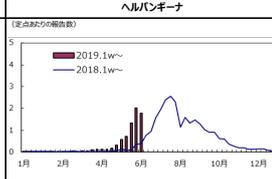


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第25週6月17日～6月23日)

第25週 の順位	第24週 の順位	感染症	2019年 第25週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第25週 の定点あたり 報告数	2019年第25週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	手足口病	9.15	9%減	0.48	1歳_39%
2	2	感染性胃腸炎	5.51	2%減	5.97	1歳_13%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.59	10%減	2.85	4歳_17%
4	4	ヘルパンギーナ	1.78	12%減	0.38	1歳_32%
5	5	伝染性紅斑	1.18	24%増	0.16	4歳_21%

第25週のコメント

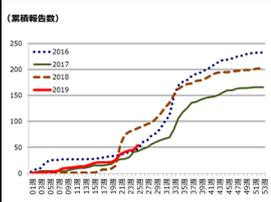
～腸管出血性大腸菌感染症～ 食内・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染された食品を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こすことがある。3～5日の潜伏期を経て、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6～7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第25週6月17日～6月23日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報告 数	
3類感染症	細菌性赤痢 (Shigella flexneri)	1							1	3	
	腸管出血性大腸菌感染症	9	1						2	6	54
4類感染症	Dengue熱	1		1						16	
	レジオネラ症(肺炎型)	4		1					3	36	
5類感染症	慢性肺炎球菌感染症	1				1				30	
	水痘(入院例)	3							1	2	160
	梅毒	1							1	11	
	百日咳	8	1		1				1	3	517
百日咳	6	1		1				1	3	438	
結核 (2019年4月分)	結核 新登録患者数: 134名										(内 肺・喀痰塗抹陽性 51名)
										(府内累積報告数 555名、内 肺・喀痰塗抹陽性 216名)	
(2019年6月25日 集計分)											

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第26週 (6月24日～6月30日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病、減少傾向も警報レベルを超えている」

第26週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は4,131例であり、前週比4.7%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ9.04、4.61、2.39、1.88、1.22であった。

手足口病は前週比1%減の1,780例で、大阪市北部13.54、南河内12.56、中河内10.20、大阪市南部9.89、豊能9.36で、引き続き大阪市東部を除く全ブロックで警報レベル開始基準値5を超えている。

感染性胃腸炎は16%減の908例で、南河内7.94、大阪市西部5.70、北河内5.63であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は8%減の470例で、南河内4.13、北河内3.52、中河内3.35、堺市3.11である。

ヘルパンギーナは6%増の371例で、大阪市北部3.69、大阪市南部3.39、大阪市西部2.40、北河内2.04であった。

伝染性紅斑は3%増の240例で、北河内2.70、中河内1.85、堺市1.47である。

手足口病

ヘルパンギーナ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第26週6月24日～6月30日)

第26週 の順位	第25週 の順位	感染症	2019年 第26週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第26週 の定点あたり 報告数	2019年第26週の 年別別 患者発生数 最大割合
1	1	手足口病	9.04	1%減	0.78	1歳_35%
2	2	感染性胃腸炎	4.61	16%減	5.26	1歳_16%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.39	8%減	2.90	4歳_15%
4	4	ヘルパンギーナ	1.88	6%増	0.76	1歳_32%
5	5	伝染性紅斑	1.22	3%増	0.26	5歳_20%

第26週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり(カタル期)、百日咳特有の咳が出始める(痙攣期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗生薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[百日咳とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第26週6月24日～6月30日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉市	大阪市	大阪府	府内累積報告数
3類感染症											
	細菌性赤痢 (<i>S. sonnei</i>)	1							1	1	4
	腸管出血性大腸菌感染症	2		1						1	56
4類感染症											
	チタンコア熱	1			1				1	1	1
	デング熱	3		1					2	2	19
	レジオネラ症 (肺炎型)	4				1	1		2	2	41
5類感染症											
	アメーバ赤痢	2							2	2	36
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	1	1					2	2	81
	急性脳炎	1							1	1	14
	クニツェルツェルヤコフ病(高発性アリオン病古典型)	1		1							5
	新変型溶血性レンサ球菌感染症	1							1	1	26
	後天性免疫不全症候群	1							1	1	65
	シラリア症	1		1							5
	慢性的インフルエンザ感染症	1	1								31
	慢性的肺炎球菌感染症	3				1			2	2	164
	梅毒	10	1		2				1	6	536
	百日咳	18	3	1	1	1	1	5	2	4	460
	麻疹	1							1	1	118
	風しん	1									1
	麻しん	1									1
144											
結核	結核 新登録患者数: 134名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 51名)									
(2019年4月分)		(府内累積報告数 555名、内 肺・喀痰塗抹陽性 216名)									
		(2019年7月2日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第27週 (7月1日～7月7日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病、減少傾向だが全ブロックで警報レベル」

第27週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は4,205例であり、前週比1.8%増であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.78、4.69、2.35、2.20、1.31であった。

手足口病は前週比3%減の1,729例で、大阪市南部11.89、豊能11.50、南河内11.31、大阪市北部10.85、北河内9.07で、全ブロックで警報レベル開始基準値5を超えた。

感染性胃腸炎は2%増の923例で、南河内9.94、北河内6.22、中河内5.90、豊能4.73である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の462例で、南河内3.88、北河内3.85、中河内2.95、堺市2.90であった。

ヘルパンギーナは1%増の433例で、大阪市北部3.92、北河内3.22、大阪市南部2.78、南河内2.38である。

伝染性紅斑は7%増の257例で、北河内4.11、堺市1.58、中河内1.30、豊能1.05であった。

手足口病

ヘルパンギーナ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第27週7月1日～7月7日)

第27週 の順位	第26週 の順位	感染症	2019年 第27週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第27週 の定点あたり 報告数	2019年第27週の 年別別 患者発生数 最大割合
1	1	手足口病	8.78	3%減	1.02	1歳_32%
2	2	感染性胃腸炎	4.69	2%増	4.97	1歳_17%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.35	2%減	2.54	4歳_18%
4	4	ヘルパンギーナ	2.20	17%増	0.96	1歳_29%
5	5	伝染性紅斑	1.31	7%増	0.18	5歳_19%

第27週のコメント

～デング熱～ 海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

デング熱

デング熱は、ネッタイシマカやヒトシジミなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽微なデング熱と、重症型のデング出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がデング熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例(輸入症例)が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[デング熱とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第27週7月1日～7月7日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉市	大阪市	大阪府	府内累積報告数
3類感染症											
	腸管出血性大腸菌感染症	8	1	1	1	1				4	64
4類感染症											
	デング熱	3							1	2	24
5類感染症											
	アメーバ赤痢	3	1			1			1	1	40
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2		1					1	1	85
	新変型溶血性レンサ球菌感染症	2		1					1	1	28
	慢性的肺炎球菌感染症	1							1	1	166
	梅毒	6	2						1	3	559
	百日咳	19	6		1	1			6	5	485
結核	結核 新登録患者数: 150名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 49名)									
(2019年5月分)		(府内累積報告数 708名、内 肺・喀痰塗抹陽性 267名)									
		(2019年7月9日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2019年 第28週 (7月8日～7月14日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 ピークは過ぎつつあるが、流行続く」

第28週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は4,104例であり、前週比2.4%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で、以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ18.57、4.38、2.34、2.21、1.09であった。

手足口病は前週比2%減の1,689例で、南河内12.56、豊能10.36、北河内10.19、大阪市南部9.72、大阪市西部9.60であった。

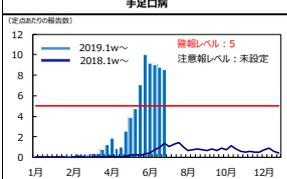
感染性胃腸炎は7%減の862例で、南河内8.50、北河内5.26、中河内5.00であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は微減の460例で、南河内5.19、北河内3.44、中河内3.00であった。

ヘルパンギーナは微増の435例で、大阪市北部4.31、豊能3.41、大阪市南部2.78である。

伝染性紅斑は16%減の215例で、北河内2.82、泉州1.85、堺市1.26であった。

手足口病



ヘルパンギーナ

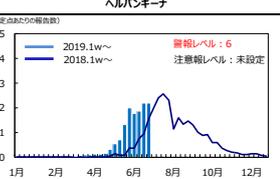


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第28週7月8日～7月14日)

第28週 の順位	第27週 の順位	感染症	2019年 第28週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第28週の 定点あたり 報告数	2019年第28週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	手足口病	8.57	2%減	1.41	1歳_29%
2	2	感染性胃腸炎	4.38	7%減	4.65	1歳_17%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.34	0.4%減	2.65	6歳_15%
4	4	ヘルパンギーナ	2.21	0.5%増	1.57	1歳_23%
5	5	伝染性紅斑	1.09	16%減	0.17	4歳_16%

第28週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2019年の梅毒報告数は500例を超え、2018年同時期と同程度

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2018年の報告数は、1100例を超え、前年比1.4倍を上回った。感染療法が施行された1999年以降、最も多く報告されている。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗生薬の投与で治癒が期待できる。



(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[梅毒とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第28週7月8日～7月14日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内業積 報告数	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3	1		1				1	68	
4類感染症	E型肝炎	1						1	1	4	
	デング熱	1						1	1	25	
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	1	1	1				1	19	
	急性細菌	2	1	1	1					17	
	優毒性肺炎球菌感染症	3					1	1	1	171	
	水痘 (入院例)	2	1							1	13
	梅毒	12	5		2				1	4	589
	百日咳	15	5	1	1	1		3	2	3	507
結核 (2019年5月分)	結核 新登録患者数: 150名 (府内業積報告数 708名、内 肺・喀痰塗抹陽性 267名)										

(2019年7月16日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2019年 第29週 (7月15日～7月21日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行、排泄物の適切な処理とタオルを共用しないことが重要

定点把握感染症

「夏型感染症 (手足口病、ヘルパンギーナ) 減少」

第29週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,326例であり、前週比19.0%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で、以下、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ16.01、3.78、1.89、1.80、1.29であった。

手足口病は前週比30%減の1,184例で、大阪市北部9.23、大阪市西部8.10、北河内7.82、南河内7.25、大阪市南部7.00であった。

感染性胃腸炎は14%減の745例で、南河内5.94、中河内5.65、北河内4.67であった。

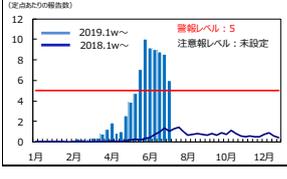
ヘルパンギーナは14%減の373例で、大阪市北部4.31、大阪市西部2.90、北河内2.85であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は23%減の354例で、南河内3.31、中河内3.05、北河内2.63である。

伝染性紅斑は19%増の255例で、北河内3.44、堺市1.79、泉州1.70であった。

第6位のRSウイルス感染症は21%増の140例で、3週連続で増加している。

手足口病



ヘルパンギーナ

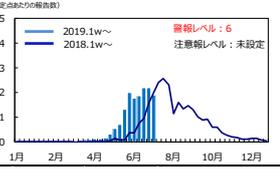


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第29週7月15日～7月21日)

第29週 の順位	第28週 の順位	感染症	2019年 第29週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第29週の 定点あたり 報告数	2019年第29週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	手足口病	6.01	30%減	1.10	1歳_30%
2	2	感染性胃腸炎	3.78	14%減	4.10	1歳_16%
3	4	ヘルパンギーナ	1.89	14%減	1.97	1歳_29%
4	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.80	23%減	1.86	3歳_13%
5	5	伝染性紅斑	1.29	19%増	0.11	5歳_18%

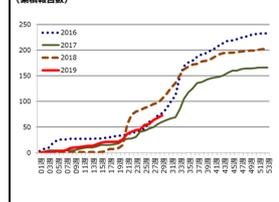
第29週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。



(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第29週7月15日～7月21日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内業積 報告数	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5	1	1					3	73	
4類感染症	A型肝炎	1		1						13	
	デング熱 (4型)	1							1	26	
	日本紅斑熱	1							1	1	
	レジオネラ症 (肺炎型)	2	1						1	45	
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1						1		93	
	新変種溶血性レンサ球菌感染症	1	1							31	
	後天性免疫不全症候群	2							2	68	
	優毒性肺炎球菌感染症	2	1							1	176
	梅毒	7	1		1					5	610
	百日咳	5	2						2	1	518
	風しん	1								1	120
	麻疹	1								1	145
結核 (2019年5月分)	結核 新登録患者数: 150名 (府内業積報告数 708名、内 肺・喀痰塗抹陽性 267名)										

(2019年7月23日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第30週 (7月22日～7月28日)

今週のコメント
～手足口病～ 手洗いの励行、排泄物の適切な処理とタオルを共用しないことが重要

定点把握感染症

「手足口病 さに減少」

第30週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,111例であり、前週比6.5%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.53、4.17、1.93、1.77、1.07であった。

手足口病は前週比25%減の892例で、大阪市西部6.00、大阪市北部5.85、北河内5.82、豊能5.55、中河内5.45であった。

感染性胃腸炎は10%増の821例で、南河内8.50、北河内5.82、中河内5.20、三島4.24、大阪市北部3.85である。

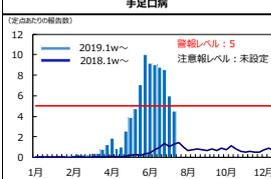
ヘルパンギーナは2%増の380例で、大阪市北部3.69、大阪市西部2.70、北河内2.59であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の348例で、南河内3.88、中河内2.65、北河内2.15である。

伝染性紅斑は18%減の210例で、泉州1.95、北河内1.56、南河内1.31であった。

第6位のRSウイルス感染症は7%増の150例で、4週連続で増加している。

手足口病



RSウイルス感染症

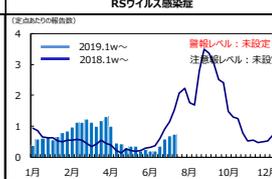


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第30週7月22日～7月28日)

第30週 の順位	第29週 の順位	感染症	2019年 第30週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第30週 の定点あたり 報告数	2019年第30週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	手足口病	4.53	25%減	1.32	1歳_28%
2	2	感染性胃腸炎	4.17	10%増	4.24	1歳_19%
3	3	ヘルパンギーナ	1.93	2%増	2.39	1歳_26%
4	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.77	2%減	1.82	4歳_14%
5	5	伝染性紅斑	1.07	18%減	0.14	5歳_22%

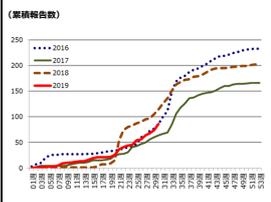
第30週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食内・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染された食品を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こすことがある。3-5日の潜伏期を経て、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第30週7月22日～7月28日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内 累計
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	12	1	2		5			4	86
4類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)	3				3				48
5類感染症	アノーバ赤痢	1	1							46
	ウイルス性肝炎 (B型)	1								12
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2							2	99
	急性腸性疼痛	1						1		3
	急性腸管出血性レンサ球菌感染症	1				1				32
	後天性免疫不全症候群	1						1		70
	梅毒	8	1						7	628
	パノマイタン耐性腸球菌感染症	1			1					18
	百日咳	9	1		1		1	1	1	539
	麻疹	2			1					122
風しん	2								147	
結核	結核 新登録患者数: 150名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 49名)								
(2019年5月分)	(府内累計報告数 708名、内 肺・喀痰塗抹陽性 267名)									

(2019年7月30日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第31週 (7月29日～8月4日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加」

第31週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,734例であり、前週比12.1%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.55、3.45、1.70、1.41、1.14であった。

感染性胃腸炎は前週比15%減の699例で、南河内6.75、中河内4.70、泉州4.10、北河内4.07、大阪市西部3.80である。

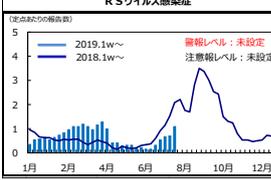
手足口病は前週比24%減の679例で、大阪市北部6.08、中河内4.45、北河内4.22であった。

ヘルパンギーナは前週比12%減の335例で、大阪市北部3.15、北河内2.70、大阪市西部2.50である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比20%減の277例で、南河内2.56、北河内1.85、堺市1.84であった。

RSウイルス感染症は前週比49%増の224例で、大阪市北部3.46、堺市2.00、大阪市南部1.56である。

RSウイルス感染症



手足口病

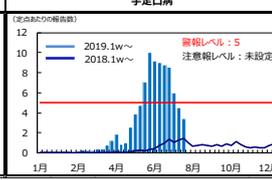


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第31週7月29日～8月4日)

第31週 の順位	第30週 の順位	感染症	2019年 第31週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第31週 の定点あたり 報告数	2019年第31週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	2	感染性胃腸炎	3.55	15%減	4.29	1歳_19%
2	1	手足口病	3.45	24%減	1.44	1歳_30%
3	3	ヘルパンギーナ	1.70	12%減	2.56	1歳_31%
4	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.41	20%減	1.68	5歳_18%
5	6	RSウイルス感染症	1.14	49%増	2.09	1歳_41%

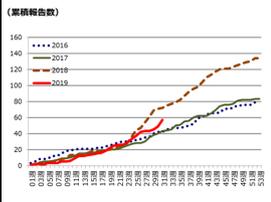
第31週のコメント

～レジオネラ症～ 2019年第31週までの累積報告数は57例です。

全数把握感染症

レジオネラ症

レジオネラ症は、レジオネラ・ニューモフィラ (*Legionella pneumophila*) を代表とするレジオネラ属による細菌感染症である。土壌や水環境に、普遍的に存在する菌である。人工環境 (噴水等の水泉施設、ビル屋上に立つ冷却塔、ジャグジー、加湿器等) や循環水を利用した風呂から発生したレジオネラ属菌を含むエアロソルを吸入することで感染する。病型として肺炎と一過性で自然に改善するポテンテック熱がある。ヒト-ヒト感染はない。健康者も罹患するが、細胞性免疫機能が低下している、乳幼児、高齢者など、喫煙者、大酒家は重篤化する可能性が高い。



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[レジオネラ症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第31週7月29日～8月4日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内 累計
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	8	1	2	2	1			2	95
4類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)	8	1	1	1	1	1	1	3	57
5類感染症	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	5	1	1	1			1	1	110
	創傷性腸管出血性レンサ球菌感染症	2					1		1	34
	慢性的インフルエンザウイルス感染症	1	1							32
	慢性的腸炎感染症	1	1							5
	梅毒	6	2					1	3	642
	百日咳	10	2		1	1	1	3	2	555
結核	結核 新登録患者数: 141名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 50名)								
(2019年6月分)	(府内累計報告数 842名、内 肺・喀痰塗抹陽性 320名)									

(2019年8月6日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第32週 (8月5日～8月11日) ～2019年 第33週 (8月12日～8月18日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 今後も注意」

第32週、第33週のデータを合わせて報告するが、第33週は医療機関の実務日数が少なく、全体の報告症例数が通常の約1/3程度であった。

第32週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,306例であり、前週比15.7%減である。報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.39、2.07、1.48、1.40、1.25であった。

前週比で感染性胃腸炎は49%減、手足口病は40%減、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%増、RSウイルス感染症は23%増、ヘルパンギーナは26%減である。

第33週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,185例で、前週比48.6%減であった。

報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナの順で、それぞれの定点あたり報告数は1.67、1.05、0.98、0.64、0.58である。

前週比で感染性胃腸炎は前週比51%減、RSウイルス感染症は25%減、手足口病は53%減、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は57%減、ヘルパンギーナは53%減であった。今後もRSウイルス感染症の動向に注意が必要である。

RSウイルス感染症

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第33週8月12日～8月18日)

第33週 の順位	第32週 の順位	感染症	2019年 第33週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第33週の 定点あたり 報告数	2019年第33週の 年動向 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	1.67	51%減	2.48	1歳_15%
2	4	RSウイルス感染症	1.05	25%減	1.76	1歳未満_44%
3	2	手足口病	0.98	53%減	0.67	1歳_28%
4	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.64	57%減	0.73	4歳_14%
5	5	ヘルパンギーナ	0.58	53%減	1.15	1歳_30%

第33週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ペロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(ホー)157、O26、O111がある。汚染された食肉を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期を待って、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第33週8月12日～8月18日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州市	大阪府	府内 累計
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7	1	1				1	4	110
	腸チフス	1					1			4
4 類感染症	チクソニア熱	1						1		2
	レジオネラ症 (肺炎型)	2	1					1		67
5 類感染症	後天性免疫不全症候群	1							1	77
	侵袭性肺炎球菌感染症	3	1	1				1		186
	梅毒	1								667
	百日咳	4		1		1	1	1	1	589
	風しん	1								125
結核 (2019年6月分)	結核 新登録患者数: 141名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 50名) (府内累計報告数 842名、内 肺・喀痰塗抹陽性 320名)								

(2019年8月20日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第34週 (8月19日～8月25日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 引き続き注意を」

第34週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,928例であり、前週比62.7%増(お盆休み前の第32週比27.0%減、以下同じ)であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナの順で、定点あたりの報告数はそれぞれ3.54、1.24、1.10、1.03、0.76であった。

感染性胃腸炎は前週比113%増(第32週比11%減)の698例で、南河内6.13、中河内4.45、三島4.41、泉州4.25、豊能4.00である。

RSウイルス感染症は前週比18%増(同21%減)の244例で、大阪市北部2.31、南河内2.25、大阪市西部2.00であった。

手足口病は前週比13%増(同53%減)の217例で、大阪市北部1.92、南河内1.88、中河内1.55である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比62%増(同38%減)の202例で、南河内1.94、泉州1.55、中河内1.30であった。

ヘルパンギーナは前週比30%増(同48%減)の150例で、中河内1.45、南河内1.25、大阪市北部1.00である。

RSウイルス感染症

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第34週8月19日～8月25日)

第34週 の順位	第33週 の順位	感染症	2019年 第34週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第34週の 定点あたり 報告数	2019年第34週の 年動向 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	3.54	113%増	3.47	1歳_17%
2	2	RSウイルス感染症	1.24	18%増	1.70	1歳未満_45%
3	3	手足口病	1.10	13%増	0.73	1歳_27%
4	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.03	62%増	1.18	3歳_13%
5	5	ヘルパンギーナ	0.76	30%増	1.58	1歳_25%

第34週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2019年の梅毒報告数は600例を超え、2018年同時期と同程度

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2018年の報告数は、1,100例を超え、前年比1.4倍を上回った。感染症法が施行された1999年以降、最も多く報告されている。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治療が期待できる。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第34週8月19日～8月25日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります(報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州市	大阪府	府内 累計
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	8	1	2					1	119
	A型肝炎	1	1	1						16
4 類感染症	デング熱	3						1	2	32
	レジオネラ症 (肺炎型)	3			1					71
5 類感染症	カルバペナム耐性腸内細菌科細菌感染症	1							1	120
	侵袭性肺炎球菌感染症	1	1							188
	梅毒	11		1				1	1	692
	パロマイコチン耐性腸球菌感染症	2							1	20
	百日咳	9	1	1			1	3	3	604
結核 (2019年6月分)	結核 新登録患者数: 141名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 50名) (府内累計報告数 842名、内 肺・喀痰塗抹陽性 320名)								

(2019年8月27日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第35週 (8月26日～9月1日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 前週比91%増」

第35週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,485例であり、前週比28.9%増であった。定点あたりの報告数の第1位は感染性胃腸炎で、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、ヘルパンギーナの順で、定点あたりの報告数はそれぞれ14.01、2.37、1.50、1.45、0.96であった。
感染性胃腸炎は前週比13%増の790例で、南河内6.75、北河内5.96、中河内4.80、大阪市南部3.78、泉州3.70である。
RSウイルス感染症は前週比91%増の467例で、大阪市北部6.00、大阪市東部3.47、大阪市西部3.20であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比46%増の295例で、南河内2.63、北河内2.15、堺市1.84である。
手足口病は前週比31%増の285例で、南河内3.31、大阪市北部2.62、中河内2.05であった。
ヘルパンギーナは前週比26%増の189例で、大阪市北部1.54、中河内1.50、北河内1.07である。

RSウイルス感染症

2019.1w～ (赤線) 2018.1w～ (青線)
警報レベル: 未設定
注意報レベル: 未設定

感染性胃腸炎

2019.1w～ (赤線) 2018.1w～ (青線)
警報レベル: 20
注意報レベル: 未設定

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第35週8月26日～9月1日)

第35週の順位	第34週の順位	感染症	2019年第35週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第35週の定点あたり報告数	2019年第35週年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	4.01	13%増	3.86	1歳_16%
2	2	RSウイルス感染症	2.37	91%増	2.79	1歳_45%
3	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.50	46%増	1.33	5歳_14%
4	3	手足口病	1.45	31%増	0.83	1歳_33%
5	5	ヘルパンギーナ	0.96	26%増	1.34	1歳_24%

第35週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり(カタリ期)、百日咳特有の咳が出始める(痙攣期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗生薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

(紫線) 2018 (赤線) 2019

(紫線) 2018 (赤線) 2019

[感染症発生センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[百日咳とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第35週8月26日～9月1日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉南市	大阪府	府内累計報告数
3類感染症										
細菌性赤痢 (<i>S. sonnei</i>)	1							1		5
腸管出血性大腸菌感染症	6	2		1		1	1		1	126
4類感染症										
Dengue熱	2			1		1				34
レジオネラ症 (肺炎型)	4							2	2	75
5類感染症										
A型肝炎	2	1							1	51
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	1					1		1	128
前症型溶血性レンサ球菌感染症	1									40
水痘 (入院例)	1									16
梅毒	11	1			1				1	8
百日咳	11								3	8
風しん	1									1
結核										
結核 新登録患者数: 146名										(内 肺・喀痰塗抹陽性 57名)
(2019年7月分)										(府内累積報告数 984名、内 肺・喀痰塗抹陽性 380名)

(2019年9月3日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第36週 (9月2日～9月8日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 さらに増加」

第36週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,787例であり、前週比12.2%増であった。定点あたりの報告数の第1位は感染性胃腸炎で、RSウイルス感染症、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナの順で、定点あたりの報告数はそれぞれ13.86、3.58、1.57、1.41、1.26であった。
感染性胃腸炎は前週比4%減の756例で、南河内7.31、中河内4.70、三島4.41、豊能4.14、北河内3.85である。
RSウイルス感染症は前週比50%増の701例で、大阪市西部6.22、大阪市北部5.92、堺市5.11、南河内4.81、大阪市東部4.27であった。
手足口病は前週比8%増の308例で、南河内3.75、大阪市北部2.23、三島1.77である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比6%減の276例で、南河内2.88、大阪市南部2.11、北河内1.82であった。
ヘルパンギーナは前週比30%増の246例で、南河内2.25、大阪市北部2.23、中河内1.85である。

RSウイルス感染症

2019.1w～ (赤線) 2018.1w～ (青線)
警報レベル: 未設定
注意報レベル: 未設定

感染性胃腸炎

2019.1w～ (赤線) 2018.1w～ (青線)
警報レベル: 20
注意報レベル: 未設定

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第36週9月2日～9月8日)

第36週の順位	第35週の順位	感染症	2019年第36週の定点あたり報告数	前週比増減	2018年第36週の定点あたり報告数	2019年第36週年齢別患者発生数最大割合
1	1	感染性胃腸炎	3.86	4%減	3.67	1歳_18%
2	2	RSウイルス感染症	3.58	50%増	3.49	1歳_40%
3	4	手足口病	1.57	8%増	0.72	1歳_25%
4	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.41	6%減	1.40	4歳5歳_14%
5	5	ヘルパンギーナ	1.26	30%増	1.47	1歳_28%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告患者)	0.27	224%増	0.05	10-14歳_20%

第36週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄・手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(serotype)157、O26、O111がある。汚染された食肉を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起す場合がある。3-5日の潜伏期を置いて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から5週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。

(紫線) 2016 (赤線) 2017 (青線) 2018 (黒線) 2019

[感染症発生センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第36週9月2日～9月8日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉南市	大阪府	府内累計報告数
3類感染症										
細菌性赤痢 (<i>S. sonnei</i>)	2							2		7
腸管出血性大腸菌感染症	10	2	6			1				138
4類感染症										
A型肝炎	1									17
Dengue熱	2									37
マラリア (熱帯熱)	1			1						3
レジオネラ症 (肺炎型)	6	1	1	1					1	81
5類感染症										
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1	1								127
前症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					42
後天性免疫不全症候群	1	1								81
慢性肺炎球菌感染症	1	1								188
梅毒	6			1	1					4
百日咳	15	3				2	2	3	4	641
結核										
結核 新登録患者数: 146名										(内 肺・喀痰塗抹陽性 57名)
(2019年7月分)										(府内累積報告数 984名、内 肺・喀痰塗抹陽性 380名)

(2019年9月10日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第39週 (9月23日～9月29日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 減少続く」

第39週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は総計2,207例であり、前週比11.7%減であった。定点あたり報告数の第1位はRSウイルス感染症で、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.85、2.86、1.44、0.85、0.61であった。

RSウイルス感染症は前週比9%減の755例で、大阪市北部6.62、南河内6.06、大阪市西部5.67、堺市5.42、北河内5.00である。

感染性胃腸炎は18%減の560例で、南河内4.63、中河内4.30、泉州3.60であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、ほぼ前週の282例で、南河内2.06、中河内2.05、北河内1.89である。

手足口病は31%減の166例で、南河内1.75、北河内1.15、大阪市北部1.31であった。

伝染性紅斑は22%増の120例で、泉州1.55、中河内0.80、大阪市北部0.77である。

インフルエンザは22%減の90例で、定点あたり報告数は0.30であった。北河内0.86、大阪市西部0.57、豊能0.38で、今後の動向に注意を要する。

RSウイルス感染症

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第39週9月23日～9月29日)

第39週 の順位	第38週 の順位	感染症	2019年 第39週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第39週 の定点あたり 報告数	2019年第39週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	RSウイルス感染症	3.85	9%減	2.52	1歳_34%
2	2	感染性胃腸炎	2.86	18%減	2.86	1歳_16%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.44	微増	1.52	4歳_17%
4	4	手足口病	0.85	31%減	0.71	1歳_31%
5	6	伝染性紅斑	0.61	22%増	0.13	4歳_20%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.30	22%減	0.15	10-14歳_19%

第39週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食内・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ペロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染された食料を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期を経て、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症候群を発症する。

(累積報告数)

[感染症発生学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第39週9月23日～9月29日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	大阪府内 累計報告数	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5			1				4	160	
4類感染症	チクングニア熱	1							1	3	
	デング熱	2						2	2	45	
	レジオネラ症 (肺炎型)	2							2	94	
5類感染症	アメーバ赤痢	1	1							55	
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2				1			1	141	
	新変型溶血性レンサ球菌感染症	1							1	47	
	後天性免疫不全症候群	2							2	93	
	慢性的肺炎球菌感染症	1	1							198	
	梅毒	11	4		1		1			5	790
	播種性クリプトコックス症	1	1	1							6
パンコマイン耐性球菌感染症	2			1	1					23	
百日咳	6	1	1					1	3	685	
結核 (2019年7月分)	結核 新登録患者数: 146名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 57名)									
		(府内累計報告数 984名、内 肺・喀痰塗抹陽性 380名)									
		(2019年10月1日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第40週 (9月30日～10月6日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 減少続くも昨年同時期より高いレベル」

第40週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数は総計2,274例であり、前週比3.0%増であった。定点あたり報告数の第1位はRSウイルス感染症で、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.55、3.27、1.47、0.82、0.77であった。

RSウイルス感染症は前週比8%減の695例で、大阪市北部7.15、大阪市西部5.00、南河内4.94、堺市4.26、北河内4.19である。

感染性胃腸炎は14%増の640例で、南河内5.63、大阪市北部4.92、大阪市西部4.67であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%増の288例で、中河内2.50、南河内2.25、大阪市西部2.22であった。

手足口病は3%減の161例で、南河内2.13、北河内1.26、大阪市北部・大阪市西部1.00であった。

伝染性紅斑は26%増の151例で、泉州1.55、南河内1.19、大阪市北部1.08であった。

インフルエンザは3%増の93例で、定点あたり報告数は0.31であった。大阪市西部0.71、北河内0.62、大阪市北部0.47で、昨年同時期より、やや高いレベルが続いている。

RSウイルス感染症

インフルエンザ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第40週9月30日～10月6日)

第40週 の順位	第39週 の順位	感染症	2019年 第40週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第40週 の定点あたり 報告数	2019年第40週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	RSウイルス感染症	3.55	8%減	2.43	1歳_36%
2	2	感染性胃腸炎	3.27	14%増	3.00	1歳_12%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.47	2%増	1.74	5歳、10-14歳_16%
4	4	手足口病	0.82	3%減	0.91	1歳、2歳_24%
5	5	伝染性紅斑	0.77	26%増	0.25	4歳_23%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.31	3%増	0.21	10-14歳、20歳以上_18%

第40週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり(カタル期)、百日咳特有の咳が出始める(痙攣期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗生薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

(累積報告数)

[感染症発生学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[百日咳とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第40週9月30日～10月6日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	大阪府内 累計報告数	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5	1	1	1				2	165	
4類感染症	A型肝炎	1							1	21	
	日本紅斑熱	1					1			5	
	レジオネラ症 (肺炎型)	2					1	1		97	
5類感染症	アメーバ赤痢	1				1				58	
	新変型溶血性レンサ球菌感染症	2	1						1	49	
	慢性的肺炎球菌感染症	3			1				2	202	
	梅毒	10	2		3					5	810
	百日咳	10	2			1	1		2	4	695
結核 (2019年8月分)	結核 新登録患者数: 138名	(内 肺・喀痰塗抹陽性 54名)									
		(府内累計報告数 1,121名、内 肺・喀痰塗抹陽性 439名)									
		(2019年10月8日 集計分)									

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第41週 (10月7日～10月13日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 引き続き昨年同時期より高いレベル」

第41週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,333例であり、前週比2.6%増であった。定点あたり報告数の第1位はRSウイルス感染症で、以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.58、3.37、1.81、0.91、0.66であった。

RSウイルス感染症は前週比1%増の702例で、大阪市北部6.15、南河内内5.59、大阪市西部4.67、大阪市南部3.89であり、引き続き昨年同時期より高い報告数であり注意が必要である。

感染性胃腸炎は前週比3%増の661例で、南河内5.44、大阪市北部4.69、大阪市西部4.33であった。

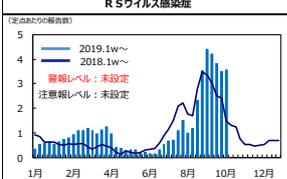
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比23%増の354例で、北河内3.07、南河内2.63、中河内2.25である。

手足口病は前週比11%増の179例で、南河内3.25、大阪市北部1.15、三島1.12であった。

伝染性紅斑は前週比15%減の129例で、泉州1.15、南河内0.94、堺市0.84である。

インフルエンザは30%減の65例で、定点あたり報告数は0.22であった。大阪市西部0.64、南河内0.54、大阪市北部0.53、北河内0.29、豊能0.24である。

RSウイルス感染症



感染性胃腸炎

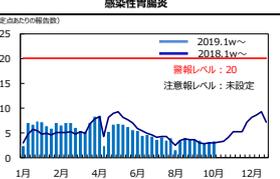


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第41週10月7日～10月13日)

第41週の順位	第40週の順位	感染症	2019年 第41週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第41週の 定点あたり 報告数	2019年第41週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	RSウイルス感染症	3.58	1%増	1.50	1歳_37%
2	2	感染性胃腸炎	3.37	3%増	2.99	1歳_14%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.81	23%増	1.52	4歳_15%
4	4	手足口病	0.91	11%増	0.79	2歳_21%
5	5	伝染性紅斑	0.66	15%減	0.15	4歳_22%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.22	30%減	0.23	20歳以上_26%

第41週のコメント

～ Deng熱 ～ 海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

Deng熱

Deng熱は、ネッタイシマカやトシジマカなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽症型のDeng熱と、重症型のDeng熱出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がDeng熱を発生する。海外渡航で感染し国内で発症する例(輸入症例)が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発生し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。



感染症疫学センターはこちら(外部リンク)
Deng熱とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第41週10月7日～10月13日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積
3類感染症										
	腸管出血性大腸菌感染症	3			1			1	1	168
	Deng熱	1							1	47
4類感染症										
	レジオネラ症 (肺炎型)	1							1	98
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1						1	151
	前症型溶血性レンサ球菌感染症	1			1					50
	侵袭性インフルエンザ菌感染症	2	1		1					36
	侵袭性肺炎球菌感染症	2	1				1			205
5類感染症										
	梅毒	10	2		3			1	4	838
	播種性クリプトコックス症	1		1						7
	百日咳	8	1	1	1	2	1	1	1	711
結核 (2019年8月分)	結核 新登録患者数: 138名	(内 肺-喀痰塗抹陽性 54名)								
		(府内累積報告数 1,121名、内 肺-喀痰塗抹陽性 439名)								

(2019年10月15日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第42週 (10月14日～10月20日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 減少」

第42週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,814例であり、前週比22.2%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、以下、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.05、2.37、1.52、0.75、0.43であった。

感染性胃腸炎は前週比10%減の597例で、南河内5.94、中河内4.65、大阪市北部3.46、泉州3.35、三島3.06である。

RSウイルス感染症は前週比34%減の464例で、大阪市北部5.00、南河内4.75、北河内3.11であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比16%減の298例で、南河内2.25、中河内2.05、北河内2.04である。

手足口病は前週比18%減の147例で、南河内1.63、三島1.35、大阪市南部1.22であった。

伝染性紅斑は前週比35%減の84例で、大阪市北部0.85、南河内0.81、堺市0.63である。

インフルエンザは8%増の70例で、定点あたり報告数は0.23であった。中河内0.39、南河内0.38、大阪市西部0.36、大阪市北部0.32、泉州0.27である。

RSウイルス感染症



感染性胃腸炎

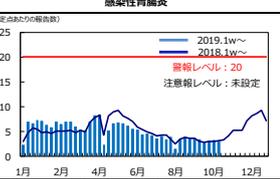


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第42週10月14日～10月20日)

第42週の順位	第41週の順位	感染症	2019年 第42週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第42週の 定点あたり 報告数	2019年第42週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	2	感染性胃腸炎	3.05	10%減	3.08	1歳_14%
2	1	RSウイルス感染症	2.37	34%減	1.31	1歳未満_38%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.52	16%減	1.77	4歳_16%
4	4	手足口病	0.75	18%減	1.13	1歳_24%
5	5	伝染性紅斑	0.43	35%減	0.14	3歳4歳_17%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.23	8%増	0.33	4歳_16%

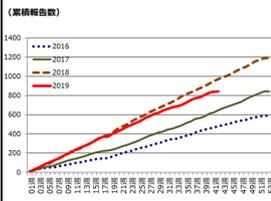
第42週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2019年の梅毒報告数は800例を超えたが、2018年同時期を下回っている

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2018年の報告数は、1100例を超え、前年比1.4倍を上回った。感染療法が施行された1999年以降、最も多く報告された。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治療が期待できる。



感染症疫学センターはこちら(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第42週10月14日～10月20日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています)

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪府	府内累積
3類感染症										
	報告はありません									
	Deng熱	1		1						48
	日本紅斑熱	1								6
	レジオネラ症 (肺炎型)	2				1	1			100
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2		1					1	154
	前症型溶血性レンサ球菌感染症	2			1	1				53
	後天性免疫不全症候群	2								2
	侵袭性インフルエンザ菌感染症	2	1							1
	侵袭性肺炎球菌感染症	4	1	1				1	1	211
	梅毒	10	1	1	1	1		2	5	865
	百日咳	13	1	2	1	3		1	5	729
結核 (2019年8月分)	結核 新登録患者数: 138名	(内 肺-喀痰塗抹陽性 54名)								
		(府内累積報告数 1,121名、内 肺-喀痰塗抹陽性 439名)								

(2019年10月23日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2019年 第43週 (10月21日～10月27日)

今週のコメント
～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 さびに減少」

第43週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,744例であり、前週比3.9%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.95、1.95、1.43、0.64、0.60であった。
感染性胃腸炎は前週比3%減の581例で、南河内4.81、中河内4.55、泉州4.00、大阪市南部3.06、大阪市西部2.67であった。
RSウイルス感染症は前週比17%減の385例で、大阪市北部4.64、北河内3.37、大阪市西部2.89、南河内2.88であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比6%減の281例で、大阪市西部2.44、泉州1.90、堺市1.79である。
手足口病は前週比15%減の125例で、南河内2.00、三島0.94、大阪市西部0.89であった。
伝染性紅斑は前週比40%増の118例で、南河内1.56、泉州1.25、中河内0.90である。

インフルエンザは10%増の77例で、定点あたり報告数は0.26であった。大阪市西部1.07、堺市0.41、北河内0.31、中河内0.26、豊能0.24である。

RSウイルス感染症

感染性胃腸炎

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第43週10月21日～10月27日)

第43週 の順位	第42週 の順位	感染症	2019年 第43週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第43週の 定点あたり 報告数	2019年第43週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	2.95	3%減	3.39	1歳_16%
2	2	RSウイルス感染症	1.95	17%減	1.24	1歳未満_39%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.43	6%減	2.04	4歳_13%
4	4	手足口病	0.64	15%減	0.85	1歳_30%
5	5	伝染性紅斑	0.60	40%増	0.20	4歳_22%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.26	10%増	0.30	20歳以上_23%

第43週のコメント

～レジオネラ症～ 2019年第43週までの累積報告数は104例です。

全数把握感染症

レジオネラ症

レジオネラ症は、レジオネラ・ニューモフィラ (*Legionella pneumophila*) を代表とするレジオネラ属菌による細菌感染症である。土壌や水環境に、普遍的に存在する菌である。人工環境 (噴水等の水施設、ビル屋上立つ冷却塔、ジャグジー、加湿器等) や循環水を利用した風呂から発生したレジオネラ属菌を含むエアロゾルを吸入することで感染する。病型として肺炎と一過性で自然に改善するポテンチアック熱がある。ヒートショックは無い。健康者も罹患するが、細胞性免疫機能が低下している、乳幼児、高齢者など、喫煙者、大酒家は重篤化する可能性が高い。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[レジオネラ症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第43週10月21日～10月27日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】発生動向調査>全数報告 をご覧ください。)

疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症										
細菌性赤痢 (<i>S.flexner</i>)	1									1
腸管出血性大腸菌感染症	3					1	1			178
4 類感染症										
マラリア (熱帯熱)	1									1
レジオネラ症 (肺炎型)	4				2					104
5 類感染症										
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	1		1						161
サルモネラ症	1					1				6
慢性的肺炎球菌感染症	3					1	1			214
梅毒	3									3
百日咳	3				2					735
結核 (2019年9月分)	結核 新登録患者数: 120名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 45名)									482名

(2019年10月29日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2019年 第44週 (10月28日～11月3日)

今週のコメント
～感染性胃腸炎～ 手洗いの励行、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「感染性胃腸炎 増加」

第44週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,931例であり、前週比10.7%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.59、2.01、1.51、0.78、0.72であった。
感染性胃腸炎は前週比22%増の708例で、南河内5.81、中河内4.85、泉州4.70、大阪市南部4.67、大阪市西部3.78であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は41%増の395例で、堺市3.16、南河内2.31、北河内2.26、中河内2.25、泉州2.20であった。
RSウイルス感染症は23%減の298例で、大阪市北部3.14、南河内2.56、北河内2.07であった。
手足口病は22%増の153例で、南河内2.38、北河内1.19、三島1.12であった。
伝染性紅斑は19%増の141例で、泉州1.45、大阪市北部1.14、南河内1.13であった。

インフルエンザは38%増の106例で定点あたり報告数は0.35である。大阪市西部1.29、南河内0.42、北河内0.41、泉州・三島0.39であった。

感染性胃腸炎

インフルエンザ

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第44週10月28日～11月3日)

第44週 の順位	第43週 の順位	感染症	2019年 第44週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第44週の 定点あたり 報告数	2019年第44週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	3.59	22%増	4.14	1歳_16%
2	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.01	41%増	1.75	5歳_18%
3	2	RSウイルス感染症	1.51	23%減	0.78	1歳未満_36%
4	4	手足口病	0.78	22%増	0.59	1歳_28%
5	5	伝染性紅斑	0.72	19%増	0.20	5歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.35	38%増	0.35	20歳以上_20%

第44週のコメント

～デング熱～ 海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

デング熱

デング熱は、ネッタイシマカやトシジマカなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽症型のデング熱と、重症型のデング出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域。特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がデング熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例 (輸入症例) が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。2019年にも、3例の国内発生報告があった。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[デング熱とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第44週10月28日～11月3日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】発生動向調査>全数報告 をご覧ください。)

疾患名 () 内の病型は今週報告のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3 類感染症										
腸管出血性大腸菌感染症	1									172
4 類感染症										
デング熱	1					1				49
レジオネラ症 (肺炎型)	1					1				106
5 類感染症										
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	7	3					1	2		168
後天性免疫不全症候群	2									2
慢性的インフルエンザ感染症	1	1								39
慢性的肺炎球菌感染症	3					1	1	1		218
梅毒	9				2	1	1	2	3	896
パンコマイン耐性球菌感染症	1									24
百日咳	9			1	1	2	1	2	2	749
風しん	1								1	127
結核 (2019年9月分)	結核 新登録患者数: 120名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 45名)									482名

(2019年11月5日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2019年 第45週 (11月4日～11月10日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 増加続く」

第45週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,780例であり、前週比7.8%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.64、1.81、1.17、0.55、0.55であった。感染性胃腸炎は前週比1%増の717例で、南河内7.69、中河内4.40、大阪市北部3.93、北河内・大阪市南部共に3.78であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は10%減の357例で、北河内2.41、南河内2.31、堺市2.26、中河内・泉州共に2.20である。RSウイルス感染症は22%減の231例で、南河内2.31、北河内2.26、大阪市北部2.14であった。伝染性紅斑は23%減の109例で、南河内1.50、泉州0.85、中河内0.80である。手足口病は29%減の108例で、南河内1.25、北河内0.85、大阪市北部0.71であった。インフルエンザは31%増の139例で、定点あたり報告数は0.46である。大阪市西部1.21、北河内0.81、南河内0.71、大阪市北部0.50、堺市0.48であった。

第45週 の順位	第44週 の順位	感染症	2019年 第45週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第45週の 定点あたり 報告数	2019年第45週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	3.64	1%増	5.21	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.81	10%減	2.46	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	1.17	22%減	0.54	1歳_39%
4	5	伝染性紅斑	0.55	23%減	0.28	4歳_6歳_19%
5	4	手足口病	0.55	29%減	0.50	1歳_28%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.46	31%増	0.60	10-14歳_21%

第45週のコメント

～ 破傷風 ～ 大阪府では、年間10名未満の報告があります

全数把握感染症

破傷風

破傷風は、破傷風菌 (*Clostridium tetani*) が産生する毒素のひとつである破傷風毒素により強直性痙攣を引き起こす感染症である。破傷風菌は芽胞の形で土壌中に広く存在し、創傷部位から体内に侵入する。侵入した芽胞は感染部位で発芽・増殖して破傷風毒素を産生する。破傷風の特徴的な症状である強直性痙攣は、破傷風毒素が主な原因であり、潜伏期間 (3～21日) の後に局所 (痙攣、開口障害、嚥下困難など) から始まり、全身 (呼吸困難や後弓反張など) に移行し、重症な患者では呼吸筋の麻痺により窒息死することがある。発病初期に、抗破傷風人免疫グロブリンの投与が効果的である。破傷風の予防には、ワクチン接種が有効である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
破傷風とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第45週11月4日～11月10日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	報告はありません								
4類感染症	6			1		2	1	2	112
レジオネラ症(肺炎型)									
5類感染症	2		1					2	61
アメーバ赤痢	2								173
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1							1	9
クロイツフェルト-ジャコブ病(古典型)	3							2	223
慢性的肺炎球菌感染症	1							1	20
水痘(入院例)	4							2	921
梅毒	1								3
破傷風	4	1		1		2			758
百日咳	1							1	128
風しん									
結核 (2019年9月分)	結核 新登録患者数: 120名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 45名) (府内累積報告数 1,236名、内 肺・喀痰塗抹陽性 482名)								

(2019年11月12日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報) 2019年 第46週 (11月11日～11月17日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ さらに増加」

第46週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,190例であり、前週比23.0%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.25、2.54、0.78、0.58、0.49であった。感染性胃腸炎は前週比44%増の1,034例で、南河内10.44、大阪市西部8.78、大阪市南部6.50、北河内5.37、中河内5.15であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は40%増の500例で、堺市4.26、大阪市西部3.67、北河内3.30、泉州3.20、中河内2.90であった。RSウイルス感染症は34%減の153例で、大阪市北部2.29、北河内1.37、大阪市西部1.11であった。伝染性紅斑は6%増の115例で、南河内1.81、泉州1.00、堺市0.79であった。手足口病は11%減の96例で、南河内1.19、大阪市南部0.72、三島0.59であった。インフルエンザは83%増の254例で、定点あたり報告数は0.84であった。大阪市西部2.29、北河内1.26、堺市1.21、南河内0.92、中河内0.87である。

第46週 の順位	第45週 の順位	感染症	2019年 第46週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第46週の 定点あたり 報告数	2019年第46週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.25	44%増	5.24	1歳_14%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.54	40%増	2.33	6歳_16%
3	3	RSウイルス感染症	0.78	34%減	0.55	1歳_39%
4	4	伝染性紅斑	0.58	6%増	0.32	5歳_23%
5	5	手足口病	0.49	11%減	0.62	1歳_23%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.84	83%増	0.40	20歳以上_18%

第46週のコメント

～後天性免疫不全症候群～
日本では、後天性免疫不全症候群 (HIV感染症を含む) の新規報告数は、毎年約1,500例である。

全数把握感染症

後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群(AIDS、エイズ)は、ヒト免疫不全ウイルス(HIV)が免疫細胞に感染し、免疫細胞を破壊して後天的に免疫不全を引き起こす疾患である。適切な治療が施されないと重篤な全身性免疫不全により日和見感染症や悪性腫瘍を引き起こす。近年、治療薬の開発が飛躍的に進み、早期に服薬治療を受ければ免疫力を落とすことなく、通常の生活を送ることが可能となった。日本国内では、日本国籍男性を中心に、同性間性的接触による感染例が多い傾向にある。毎年、国内では、新規HIV感染者と新規AIDS患者は、合計約1,500例報告されている。予防のための普及啓発、早期発見・早期治療に向けた対策が望まれる。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
後天性免疫不全症候群とは(国立感染症研究所)

疾患名 ()内の病名は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 数
3類感染症	3	1						2	176
4類感染症	2	1						1	115
アメーバ赤痢	2							1	63
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1		1				1	176
急性脳炎	1								23
急性溶血性レンサ球菌感染症	1				1				56
後天性免疫不全症候群	2					1		1	115
慢性的肺炎球菌感染症	4	1			1			2	229
梅毒	7	1	2	1				3	930
パンコマイシン耐性球菌感染症	1				1				25
百日咳	4		2					2	766
風しん	1		1						129
麻疹	1	1							148
結核 (2019年9月分)	結核 新登録患者数: 120名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 45名) (府内累積報告数 1,236名、内 肺・喀痰塗抹陽性 482名)								

(2019年11月19日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第47週 (11月18日～11月24日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 流行期入り」

第47週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,197例であり、前週より微増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑、RSウイルス感染症、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.49、2.50、0.60、0.59、0.48であった。感染性胃腸炎は前週比5%増の1,081例で、南河内11.69、大阪市北部7.50、中河内7.45、大阪市西部7.22、同南部5.78である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の493例で、大阪市西部3.56、泉州3.40、堺市3.21、北河内3.04、南河内2.75であった。

伝染性紅斑は3%増の119例で、南河内2.75、泉州1.00、中河内0.55である。

RSウイルス感染症は24%減の116例で、大阪市西部1.33、南河内1.00、大阪市北部0.79であった。手足口病は2%減の94例で、大阪市南部0.94、中河内0.85、北河内0.67である。

インフルエンザは43%増の363例で、定点あたり報告数は1.21で、流行開始の目安の1を超え、流行期入りした。大阪市西部3.14、堺市2.03、南河内1.58、大阪市北部1.45、北河内1.33、大阪市東部1.14である。

インフルエンザ

2019.1w～
2018.1w～
警戒レベル: 30
注意レベル: 10
流行開始の目安: 1

感染性胃腸炎

2019.1w～
2018.1w～
警戒レベル: 20
注意レベル: 未設定

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第47週11月18日～11月24日)

第47週 の順位	第46週 の順位	感染症	2019年 第47週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第47週の 定点あたり 報告数	2019年第47週の 年齢別 患者発生数 と大割合
1	1	感染性胃腸炎	5.49	5%増	5.17	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.50	1%減	2.25	5歳_17%
3	4	伝染性紅斑	0.60	3%増	0.38	4歳_19%
4	3	RSウイルス感染症	0.59	24%減	0.49	1歳未満_39%
5	5	手足口病	0.48	2%減	0.50	1歳_36%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.21	43%増	0.57	20歳以上_21%

第47週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2019年の梅毒報告数は900例を超えたが、2018年同時期を下回っている

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の報告数は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2019年の報告数は、900例を超え、2018年同時期を下回っている。感染症法が施行された1999年以降、最も多く報告された2018年に次いで多い。梅毒は、性行為・オラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗生剤の投与で治癒が期待できる。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
梅毒とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第47週11月18日～11月24日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【週報】発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名	報告数	豊 能 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報告数
3 類感染症									
	細菌性赤痢 (<i>S. flexneri</i>)	1							1
	腸管出血性大腸菌感染症	3	1		1		1		9
4 類感染症									
	E型肝炎	1							1
	A型肝炎	1						1	22
	デング熱	1							1
	レジオネラ症 (肺炎型)	3	1	1					1
5 類感染症									
	アメーバ赤痢	2							2
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2	1		1				182
	新変型溶血性レンサ球菌感染症	1	1						58
	後天性免疫不全症候群	2							2
	慢性的肺炎球菌感染症	6	1				1	1	3
	梅毒	9		1				2	6
	播種性クリプトコックス症	1							1
	百日咳	7	2		1		1	1	2
結核	結核 新登録患者数: 120名								(内) 肺-喀痰塗抹陽性: 45名
(2019年9月分)									(府内累積報告数 1,236名、内 肺-喀痰塗抹陽性: 482名)

(2019年11月26日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第48週 (11月25日～12月1日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 流行入り増加続」

第48週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,609例であり、前週比18.8%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.83、3.00、0.66、0.61、0.55であった。感染性胃腸炎は前週比24%増の1,345例で、南河内12.94、大阪市西部10.67、中河内8.80、大阪市南部7.83、北河内7.00である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比20%増の591例で、南河内4.50、大阪市西部3.89、北河内3.70であった。RSウイルス感染症は前週比12%増の130例で、大阪市北部1.43、大阪市西部1.22、南河内1.00である。水痘は前週比33%増の121例で、豊能1.23、北河内0.89、堺市0.68であった。伝染性紅斑は前週比9%減の108例で、南河内1.56、泉州0.80、中河内0.75である。

インフルエンザは65%増の598例で、定点あたり報告数は1.99であった。堺市4.90、大阪市西部2.86、泉州2.52、南河内2.08、大阪市北部1.85である。9ブロックで流行開始の目安の1を超えた。

インフルエンザ

2019.1w～
2018.1w～
警戒レベル: 30
注意レベル: 10
流行開始の目安: 1

感染性胃腸炎

2019.1w～
2018.1w～
警戒レベル: 20
注意レベル: 未設定

表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第48週11月25日～12月1日)

第48週 の順位	第47週 の順位	感染症	2019年 第48週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第48週の 定点あたり 報告数	2019年第48週の 年齢別 患者発生数 と大割合
1	1	感染性胃腸炎	6.83	24%増	7.13	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.00	20%増	2.82	4歳_12%
3	4	RSウイルス感染症	0.66	12%増	0.51	1歳未満_40%
4	6	水痘	0.61	33%増	0.70	8歳-14歳_16%
5	3	伝染性紅斑	0.55	9%減	0.43	5歳_21%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	1.99	65%増	1.25	10-14歳_19%

第48週のコメント

～慢性的肺炎球菌感染症～ 2018年の累積報告数は、過去4年間で最多でした

全数把握感染症

慢性的肺炎球菌感染症

慢性的肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌 (*Streptococcus pneumoniae*) による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。肺炎、菌血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗生剤が有効であるが、近年薬剤耐性菌も多く報告されている。慢性的肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
慢性的肺炎球菌感染症とは(国立感染症研究所)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第48週11月25日～12月1日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ【週報】発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名	報告数	豊 能 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報告数
3 類感染症									
	腸管出血性大腸菌感染症	2	1						1
4 類感染症									
	レジオネラ症 (肺炎型)	2						2	121
5 類感染症									
	アメーバ赤痢	1		1					67
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1					1		183
	急性脳炎	1			1				25
	新変型溶血性レンサ球菌感染症	1		1					59
	後天性免疫不全症候群	1							1
	慢性的肺炎球菌感染症	4			1	1		1	2
	水痘 (入院例)	1						1	20
	梅毒	9	1	1				1	6
	百日咳	5						1	1
	麻疹	1						1	3
結核	結核 新登録患者数: 130名								(内) 肺-喀痰塗抹陽性: 53名
(2019年10月分)									(府内累積報告数 1,368名、内 肺-喀痰塗抹陽性: 537名)

(2019年12月3日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第49週 (12月2日～12月8日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、予防接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 急増」

第49週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,714例であり、前週比4.0%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染症性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.24、3.19、0.67、0.64であった。
感染症性胃腸炎は前週比6%増の1,426例で、大阪市西部17.33、南河内11.50、中河内9.20、大阪市南部8.94、豊能7.55であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は6%増の629例で、北河内4.74、堺市4.37、南河内3.88、泉州3.85であった。
RSウイルス感染症は2%増の132例で、南河内1.69、大阪市北部1.29、大阪市西部1.22であった。
咽頭結膜熱は38%増の130例で、大阪市北部1.07、大阪市南部0.89、中河内0.85であった。
伝染性紅斑は18%増の127例で、南河内3.06と目立ち、泉州0.90、大阪市北部0.64、大阪市南部0.61であった。

インフルエンザは95%増の1,165例で、定点あたり報告数は4.87であった。堺市8.34、南河内6.08、大阪市北部5.05、大阪市西部4.36であった。全ブロックで流行開始の目安である1を超えた。

インフルエンザ

(定点あたり報告数)

2019.26w～
2018.26w～
警戒レベル: 30
注意レベル: 10
流行開始の目安: 1

感染症性胃腸炎

(定点あたり報告数)

2019.26w～
2018.26w～
警戒レベル: 20
注意レベル: 未設定

第49週 の順位	第48週 の順位	感染症	2019年 第49週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第49週 の定点あたり 報告数	2019年第49週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染症性胃腸炎	7.24	6%増	8.19	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.19	6%増	2.98	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.67	2%増	0.53	1歳未満_41%
4	6	咽頭結膜熱	0.66	38%増	0.97	1歳_27%
5	5	伝染性紅斑	0.64	18%増	0.61	5歳_18%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	3.87	95%増	2.37	10-14歳_20%

第49週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食内・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄・手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	7					1			6	190
4類感染症 テング熱	1						1			53
レジオネラ症	3			1	1	1				124
アメーバ赤痢	1	1								69
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	1						1		1	185
前症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					61
後天性免疫不全症候群	4	1	1				1	1	1	127
侵襲性肺炎球菌感染症	4			1			1	1	2	259
梅毒	6					1			5	999
パンコマイン耐性腸球菌感染症	1			1						27
百日咳	6	1	1	1	1	1	1	1	1	801
風しん	1	1	1							130
結核	結核 新登録患者数: 130名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 53名)									
(2019年10月分)	(府内累積報告数 1,368名、内 肺・喀痰塗抹陽性 537名)									
(2019年12月10日 集計分)										

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第50週 (12月9日～12月15日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、予防接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 注意レベル迫る」

第50週の小学生定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,837例であり、前週比4.5%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染症性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.70、3.51、0.62、0.56であった。
感染症性胃腸炎は前週比6%増の1,517例で、大阪市西部13.44、南河内10.94、大阪市北部9.79、中河内9.25、大阪市南部8.33であった。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は10%増の691例で、北河内6.70、南河内5.19、堺市4.21であった。
RSウイルス感染症は7%減の123例で、大阪市北部1.79、南河内1.75、大阪市西部0.89であった。
咽頭結膜熱は7%減の121例で、南河内0.94、大阪市南部0.83、中河内0.65であった。
伝染性紅斑は13%減の110例で、南河内1.94、大阪市南部0.67、泉州0.65であった。

インフルエンザは115%増の2,500例で、定点あたり報告数は8.31であった。堺市15.45、大阪市西部12.71、南河内11.79、大阪市北部9.40、豊能7.38であった。3つのブロックで注意レベルである10を超えている。

インフルエンザ

(定点あたり報告数)

2019.26w～
2018.26w～
警戒レベル: 30
注意レベル: 10
流行開始の目安: 1

感染症性胃腸炎

(定点あたり報告数)

2019.26w～
2018.26w～
警戒レベル: 20
注意レベル: 未設定

第50週 の順位	第49週 の順位	感染症	2019年 第50週 の定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第50週 の定点あたり 報告数	2019年第50週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染症性胃腸炎	7.70	6%増	8.70	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.51	10%増	2.94	5歳_16%
3	3	RSウイルス感染症	0.62	7%減	0.71	1歳未満_42%
4	4	咽頭結膜熱	0.61	7%減	1.08	1歳_20%
5	5	伝染性紅斑	0.56	13%減	0.56	7歳_19%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	8.31	115%増	3.85	10-14歳_22%

第50週のコメント

～百日咳～ 生後3か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり(カタル期)、百日咳特有の咳が出始める(痙攣期)。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗生薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

(累積報告数)

[感染症疫学センターはこちら\(外部リンク\)](#)
[百日咳とは\(国立感染症研究所\)](#)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府 内 累 積 報 告 数
3類感染症 腸管出血性大腸菌感染症	2								2	192
レジオネラ症 (肺炎型)	2						1		1	128
レジオネラ症 (非-ティファク型)	1								1	
アメーバ赤痢	1	1								70
カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症	3						1		2	188
後天性免疫不全症候群	1						1		1	129
侵襲性肺炎球菌感染症	3			1			1	1	1	262
梅毒	14	1	2	1	1	1	1	1	7	1023
百日咳	7	1		1			1	1	3	811
結核	結核 新登録患者数: 130名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 53名)									
(2019年10月分)	(府内累積報告数 1,368名、内 肺・喀痰塗抹陽性 537名)									
(2019年12月17日 集計分)										

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第51週 (12月16日～12月22日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 注意報レベルを超える」

第51週の小儿科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,020例であり、前週比6.5%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.51、3.47、0.75、0.61、0.57であった。
感染性胃腸炎は前週比11%増の1,677例で、大阪府西部13.89、南河内12.75、大阪府北部11.00、中河内9.65、北河内9.37である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の684例で、北河内5.96、大阪府西部4.78、南河内4.56であった。
RSウイルス感染症は20%増の147例で、南河内1.75、大阪府北部1.36、中河内1.25である。
伝染性紅斑は10%増の121例で、南河内3.00、大阪府北部0.79、大阪府南部0.61であった。
咽頭結膜熱は7%減の113例で、中河内1.25、三島0.82、大阪府南部0.72である。

インフルエンザは65%増の4,120例で、定点あたり報告数は13.69であった。大阪府西部23.50、堺市21.34、南河内17.75、大阪府北部17.20、中河内13.45である。9ブロックで注意報レベルである10を超えた。

インフルエンザ

注意報レベル: 10

感染性胃腸炎

注意報レベル: 20

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第51週12月16日～12月22日)

第51週 の順位	第50週 の順位	感染症	2019年 第51週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第51週の 定点あたり 報告数	2019年第51週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	8.51	11%増	9.20	1歳_15%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.47	1%減	2.99	4歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.75	20%増	0.69	1歳未満_41%
4	5	伝染性紅斑	0.61	10%増	0.48	4歳_17%
5	4	咽頭結膜熱	0.57	7%減	1.00	1歳_30%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	13.69	65%増	9.26	10-14歳_22%

第51週のコメント

～バンコマイシン耐性腸球菌感染症～ 2019年の報告数は、大阪府が全国で第一位である

全数把握感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) は、バンコマイシンに耐性を獲得した腸球菌である。術後患者や感染防御機能の低下した患者では腹膜炎、術創感染症、肺炎、敗血症などの感染症を引き起こす場合があるため、集中治療室や外科治療ユニットなど易感染者を治療する部門で問題となっており、臨床的、疫学的に重要な薬剤耐性菌である。VREによる術創感染症や腹膜炎などの治療は、抗菌薬の投与とともに感染薬の洗浄やドレナージなどを適宜組み合わせる。

(累積報告数)

● 2016 ● 2017 ● 2018 ● 2019

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
(バンコマイシン耐性腸球菌感染症(国立感染症研究所))

表 2. 大阪府全数報告数 (2019年 第51週12月16日～12月22日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 府	報 告 数 積 累	
3類感染症	報告はありません										
4類感染症	レジオネラ症 (肺炎型)										
	5	1				1			3	133	
5類感染症	アメーバ赤痢										
	1					1			1	72	
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症										
	4	1	1		1				1	192	
	急性脳炎										
	1				1					27	
	新症型溶血性レンサ球菌感染症										
	3					1			1	2	66
	後天性免疫不全症候群										
	3								3	136	
侵襲性インフルエンザ感染症											
1								1	1	40	
侵襲性肺炎球菌感染症											
4	1			1		1	1	1	1	266	
梅毒											
14			1	1				1	12	1053	
播種性クリプトкокス症											
1			1						1	9	
バンコマイシン耐性腸球菌感染症											
3			1	1				1	1	31	
百日咳											
6			1				1	3	1	817	
総括	新規登録患者数: 130名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 53名)										
(2019年10月分)	(府内累積報告数 1,368名、内 肺・喀痰塗抹陽性 537名)										

(2019年12月24日 集計分)

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2019年 第52週 (12月23日～12月29日)

今週のコメント
～インフルエンザ～ 咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 注意報レベルを超える」

第52週の小儿科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,857例であり、前週比5.4%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.09、3.02、0.72、0.69、0.50であった。
感染性胃腸炎は前週比5%減の1,594例で、南河内12.19、大阪府西部10.78、中河内9.70、北河内9.04、大阪府北部8.57である。
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比13%減の594例で、南河内5.00、北河内4.70、泉州4.05であった。
RSウイルス感染症は前週比4%減の141例で、大阪府西部1.33、大阪府北部1.29、南河内1.13である。
咽頭結膜熱は前週比20%増の136例で、大阪府南部1.33、中河内1.20、三島、南河内0.88であった。
伝染性紅斑は前週比18%減の99例で、南河内1.50、泉州0.60、大阪府北部0.50である。

インフルエンザは29%増の5,317例で、定点あたり報告数は17.72であった。大阪府西部44.79、大阪府北部23.15、堺市19.93、南河内19.75、中河内17.73である。全ブロックで注意報レベルである10を超えた。

インフルエンザ

注意報レベル: 10

感染性胃腸炎

注意報レベル: 20

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2019年 第52週12月23日～12月29日)

第52週 の順位	第51週 の順位	感染症	2019年 第52週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第52週の 定点あたり 報告数	2019年第52週の 年齢別 患者発生数 最大割合
1	1	感染性胃腸炎	8.09	5%減	7.05	1歳_16%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.02	13%減	1.95	5歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	0.72	4%減	0.70	1歳未満_43%
4	5	咽頭結膜熱	0.69	20%増	0.83	1歳_28%
5	4	伝染性紅斑	0.50	18%減	0.39	3歳_4_15%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	17.72	29%増	11.01	20歳以上_22%

第52週のコメント

～侵襲性肺炎球菌感染症～ 大阪府では毎年250例以上の報告があります

全数把握感染症

侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌 (Streptococcus pneumoniae) による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいいます。髄膜炎、敗血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告が、抗真菌薬が有効であるが、近年薬剤耐性菌も多くなると報告されている。侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。

(累積報告数)

● 2016 ● 2017 ● 2018 ● 2019

感染症疫学センターはこちらへ(外部リンク)
(侵襲性肺炎球菌感染症とは(国立感染症研究所))

表 2. 大阪府全数報告数 (2019年 第52週12月23日～12月29日)

注意: この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります (報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ「週報」発生動向調査>全数報告をご覧ください。)

疾患名 ()内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 府	報 告 数 積 累	
3類感染症	細菌性赤痢										
1				1					1	10	
腸管出血性大腸菌感染症											
1									1	193	
4類感染症	報告はありません										
5類感染症	アメーバ赤痢										
	2			1					1	74	
	カルバペム耐性腸内細菌科細菌感染症										
	2			1					2	197	
	急性脳炎										
	1				1					29	
	新症型溶血性レンサ球菌感染症										
	1			1						1	68
	侵襲性インフルエンザ感染症										
	2	1		1						42	
侵襲性肺炎球菌感染症											
7	2	2		1		1	1	3	275		
梅毒											
19	3	1	1	1		1	1	1	11	1085	
バンコマイシン耐性腸球菌感染症											
1									1	32	
百日咳											
10	1	2					1	2	4	831	
風しん											
1									1	132	
総括	新規登録患者数: 130名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 53名)										
(2019年10月分)	(府内累積報告数 1,368名、内 肺・喀痰塗抹陽性 537名)										

(2020年1月7日 集計分)